

## 【シンポジウム記録】

(2008年度 スポーツ政策シンポジウム )

### スポーツによるソーシャル・キャピタル形成の可能性

横山 勝彦・真山 達志

〈横山〉ただいまより、「スポーツによるソーシャル・キャピタル形成の可能性」と題した、同志社大学総合政策科学研究科の2008年度スポーツ政策シンポジウムを始めたいと思います。私は本日のコーディネーターを務めさせていただきます同志社大学の横山と申します。

それでは開会に先立ちまして研究科長の新川達郎先生にご挨拶をお願いします。

〈新川〉皆さん、こんにちは。ただいまご紹介をいただきました同志社大学大学院総合政策科学研究科長を務めております新川でございます。本日は、私どもの研究科で主催しておりますスポーツ政策シンポジウムにお越しいただきましてどうもありがとうございます。今日は「スポーツによるソーシャル・キャピタル形成の可能性」ということでさまざまな講師の方々にお出でをいただき、スポーツを通じての新しい国づくり、地域づくりについてそれぞれご理解を深めていただければと考えているところでございます。私ども毎年、スポーツ政策についてのシンポジウムをこの秋の時期にいつも開かせていただいております。皆様方もよくご理解いただいている通り、スポーツというものが私たちの社会を支える大きな力になっていること、またスポーツを通して、この社会をよりよく作り上げる人材が育っていくことを考えての一連のシンポジウムでもございます。

本日はその意義を改めてしっかりと考え直す意味で、大きなテーマでございます「ソーシャル・キャピタル」という比較的新しい考え方を掲げて、このシンポジウムを開かせていただくことになりました。おそらくこの言葉の意味やそれが持っている社会的な意義、スポーツとのかかわりについては、この後、各先生方からい

ろいろいろ示唆いただけるものと思っております。ただ私といたしましても、この機会にぜひ皆様方に我々の社会を支えている基本的な仕組み、そのあるべき姿について思いを致していただければと考えております。ソーシャル・キャピタルというのは比較的新しい概念と申し上げましたが、現実には我々の社会を支えている人と人とのかかわり、人と人とのネットワーク、それがよりよく働いていくことで、実は私たちの社会がうまく適切に機能していく、そういうことを指す概念でございます。

一般的にはソーシャル・キャピタルというもの成り立たせる人と人との関係の中に、たとえば信頼関係がある。またお互いに利益になる関係がある。また人と人とのコミュニケーションやネットワークがあると、このソーシャル・キャピタルが成り立っていく。その中で社会の中でどう我が身を処していくかというルール、規範というものがあるとソーシャル・キャピタルが成立するなどという言い方をして、これを理解してまいりました。今申し上げましたような信頼、相互の報酬、ネットワークや規範を、どういう水準で、どう達成していけばいいか、またそれをつくりだすために、どういう手だてがあるか、このあたりは今日、これからいろいろとご議論をいただければと思っております。ソーシャル・キャピタルというものの水準、レベルが高ければ高いほど、よりよい国づくりや地域づくりに結びついていくのだというのが基本的な考え方だとお考えいただければいいのではないかと思います。

そうした観点から今日はスポーツと国づくりについて、元総理、森喜朗様に講義をいただき、また第二の講義として山田啓一京都府知事に京

都らしい地域づくりをスポーツを通じてどう考えていくかというお話をいただける。その後、大八木淳史先生、真山達志先生、横山勝彦先生からキーノートレクチャーとしてソーシャル・キャピタルの議論を深めていただきます。そんな機会をいただけたということで私自身、大変、今日のシンポジウムを楽しみにしてまいりました。この機会に多くの方々にもこれからの国づくり、地域づくり、社会づくりとスポーツの持っている大きな役割をぜひ、ご理解を深めていただければと思っております。ソーシャル・キャピタルの条件、信頼、ルール、相互の報酬、そしてネットワークやコミュニケーション、すべてスポーツにもつながる考え方だと実感をしていただき、そんな半日になればと願っております。それではじっくりとお聴きいただければと思っております。

改めまして今日、講師にお出でいただきました森元総理、山田知事、キーノートレクチャーの先生方にお礼を申し上げますとともに、ご来場の方々にも御礼を申し上げまして、まずは開会のご挨拶とさせていただきます。本日はどうもありがとうございます。

〈横山〉ありがとうございます。ご挨拶と趣旨説明もしていただきました。

パットナムという人がアメリカで『ボーリング・アローン』という本を書かれました。日本語にしますと一人でボーリングをする。ボーリングと政治とどうかかわるか。かい摘んでいきますと、アメリカでは集団で仲間でやるボーリング人口が減って、たった一人でボーリングをしている人たちが出てきた。そうなるとボーリングの後の語らいとか意見交換ができずに、アメリカ型の市民型民主主義がだんだんできなくなってきた。国の力がなくなっていくのではないか。そういう内容の警告の論文でございました。日本におきましても凶悪犯罪が多かったり、経済が沈下したりして、これから国の力をつけないといけない。国の力は経済、富がないといけない。力もなくてはいけません。ただそれだけではなく、人と人との関係、互酬性、ネットワークが大事ではないかということだと思います。富や力とネットワークという文化性はまた、なかなか仲良くなれない、矛盾する、対立する概念でもあります。いわば金儲けと人間性は一緒になれないと対立的にとらえられていたんで

すが、このシンポジウムの狙いは、そうではなく、富・力と信頼や互酬性といったものが互いによりパートナーになれないか。信頼も大事だし、富も大事だと。そういう仕組みをつくれないうかというのが一つの狙いです。

スポーツはおわかりのように人と人との関係がなければ成立しない文化です。となると、スポーツを使って我々が今後目指さなければいけないものは富、力、信頼性、互酬性、倫理観、ネットワーク、こういうものがスポーツの持つ機能によって形成されることでありまして、こうした可能性はないか。こういうことを今日は議論していただくという機会でございます。

一つご了承いただきたいのは森先生、山田先生、ご多用の方ですので、森先生はご講演の後、皆さんでお送りさせていただきます。山田知事もご公務中で2時においでいただき、その後、ご講演となります。クロストークは大八木さん、真山先生、私の3人になります。皆さんからのご意見をいただいて、私が今、申し上げたような議論を深めることが、このシンポジウムの意義になるだろうということで、こういう形で今日は進めたいと思います。よろしく願います。

それでは森先生をご紹介します。ではよろしく願います。

#### スポーツ立国の意義

森 喜朗

(衆議院議員・元内閣総理大臣  
日本体育協会会長)

こんにちは。森喜朗です。そこにカメラがあってテレビがあるということは、しゃべることが全部通るとのことだ。フィルムも残るわけですね。承知の上でしゃべらないといけないわけですね。

私が同志社大学に招かれるのは2回目なんです。2年前はもう少し小さい部屋で、あの時は超満員だったよね。廊下まで溢れて。今日は広いところでゆっくりやろうと。あの時は結構、物珍しさがあったんでしょね。今回は京都を中心に関西ラグビー協会の関係者がとても多かったと拝見しておりました。ラグビー中心の話をしていったと思うんです。今日はさて、どうなのか、学生さんはパラパラおるし、大学を

出て何十年たっている方もいらっしゃるし、皆さんはラグビーの話を聴きたいと思ってこられたのか。関西協会の方もいらっしゃるの、あまりラグビーの批判もできないし、難しいですね。

第一、私のところに大八木さんが来られて依頼されたテーマと全部違っているんだよ。ここに来るとびっくりしました。「スポーツ立国の意義」になっている。これは麻生君にでも、しゃべらせた方がいいんじゃないか。麻生さんはね、総理になる前は我が自民党のスポーツ立国調査会会長の仕事をしておりましてね。スポーツ全般に渡ってスポーツ振興法からスポーツ省、スポーツ庁のあり方などの議論をやって、まだまとめの途中で総理になっちゃいましてね。この後、もう少し議論していかないとならんので、その話をするのかなと思ったけど、大八木さんから聞いたのは、そんなのではなかったような気がするんですね。同志社大学から来たペーパーですよ。これに何と書いてあるか。「東京オリンピック招致が何をもちたか」というテーマでしゃべれと。もう1枚はテーマが違ってましたよ。だから何でも好きなことをしゃべれということなんでしょうな。どっち向いてしゃべっていいのかわからんわけですが、この後の山田さんや横山さん、大八木さん、真山さんから、私が問題をいくつか投げかけていきますから、どうぞまた大いにそれで議論してもらった方がいいのかなと思います。

さて何から話したらいいか。私は昨日、フランスから帰ってきたばかりです。火曜日からパリにまいりまして。何しに行ったかと言うと、オリンピックではなくて2015年のワールドカップ、ラグビーの招致の働きかけに行ったんです。前回、来た時は招致に負けた後ではなかったかな、確か、ニュージーランドに。2011年、再来年行われますニュージーランドのワールドカップの時に日本が立候補いたしました、最後に残ったのは日本と南アフリカとニュージーランドが残って投票をやったんです。投票をやったら最初の選挙では南アが落ちたわけですよ。南アは2011年度ラグビーのワールドカップの前の、2010年のワールドカップサッカーの主権をいただきます。これは決まっておりますね。しかし今でも皆、疑問視しているんです。ワールドカップのサッカーなんて、南アでやれるのかなと。

なぜかと言うと、あんなに治安の悪いところでやれるのかなという思いが皆にあるんですね。関係者がおられたら恐縮ですが、我が国の商社とか民間企業で強盗や追剥にあわなかったことがないくらいのところですし、とにかく治安が悪い。そこへサッカーの選手だけでなく、多くのスポーツファンが世界中から集まってくるわけですから、何か事故でも起きないかなと皆、心配しています。もし南アのサッカーのワールドカップが成功すれば、アフリカもだんだんいい方向に行くのではないかと我々も期待しているんです。その時は南アのサッカーワールドカップを見てからということ、ラグビーは南アの票が少なく、最後に日本とニュージーランドとの争いになったんですが、結果として2票差で負けたんです。とても残念でした。

我々が主張していたのは、ただ日本でひたむきにラグビーをやりたいということではなく、ラグビーというのは、まさに人間そのものなんですね。人間教育の中でラグビーというのは最も優れたスポーツだと思っているんです。あとは大八木さんからフォローしてくださいね。ラグビーのようなすばらしいスポーツを、どうしてもっと世界に展開できないんだろうか。なんでイングランド中心にイギリス領のところだけで楽しんでいるのか。これがちょっと惜しいんですね。日本はわりとラグビーの歴史は古くて、110年超えているんですね、ラグビーが入ってから。同志社もそうですし、慶応、東大、早稲田はもう少し後だったと思いますが、大学を中心にラグビーは広がっていったんです。今では世界でラグビー人口、登録しているラグビー選手だけで125,000人、世界のラグビー人口で日本は5番目の国なんですね。それくらいラグビー人口が多い。にもかかわらずラグビーが弱いのはなぜか。体力的なものもございまして、日頃の訓練、葛藤して互いに触れ合っていくという経験が少なかったということも言えるのかなと思います。

一つは大学と高校が中心だということなんですよ、日本のラグビーは。今、ヨーロッパもオーストラリアもそうですが、ほとんどプロになっています。大学はむしろ世界で言えば技術的に強いのは日本かもしれませんね。大学は強い。ケンブリッジもオックスフォードも、ほとんど今は日本の大学には叶わない状況になっており

ます。それはどうしてか。外国では高等学校でやってきたラグビーたちは全部プロに入る。プロ契約をしてしまいます。そういう意味ではプロが最も強いということになるわけです。

去年、フランスでワールドカップがありました。優勝は南アフリカだったですね。これはある程度予想できないこともないわけですが、意外なのは2位がアルゼンチンだったわけです。アルゼンチンがなんでそんなに急に強くなったのか。ランキングから言うと日本と、どこいどっこいのところにいたはずなのに、なんで強くなったのかなと言いますと、アルゼンチンの選手のほとんどはフランスのプロの選手なんですね。フランスでプロの契約をしていて、フランスで学んで、あるいはオーストラリアで学んだ。その人たちがアルゼンチンへ帰ってアルゼンチンの国を代表して出る。これは最近ではラグビーだけではないんですね。先日、確か7人制のラグビーがありまして、日本は男女ともアジアでは優勝したんですが、意外にマレーシア、シンガポールが強くなっているんです。マレーシアがなぜ強いのかと調べてみたら、選手のほとんどがイギリスでやっているんですね。オックスフォードにマレーシアの金持ちのスポンサーがいて、全部イギリスでラグビーを学ばせて帰ってきてマレーシアの選手として試合をするから強くなって、意外な抵抗にあうんですね。ロシアでもそうです。アメリカとの間の試合もそうでしたが、アメリカも非常に強くなりました。

アメリカで興味深いのは、ヨーロッパ、オーストラリアなどでプロの選手として活躍している人もいますが、意外にバスケットボールの学生が多かったことです。アメリカのチームには。何人かの選手に話を聞いてみると、「お前、何をやってたんだ?」「俺はバスケットボールをやっていた。そこでプロで契約したお金で大学にいったら勉強したんだ。これから雇われたのでラグビーの試合に来たけど、ラグビーはせいぜい4カ月ほどやっただけだ」、と。実に呑み込みは早いんですね。「どうだい、バスケットとラグビーとどっちが面白いかい?」と言うと「ラグビーの方が面白い」「ラグビーでやったらどうだ?」「だって金にならない」と言うんですね、アメリカでは。アメリカでは野球とバスケットボールとアメリカンフットボールの試合は十分家も建つし、豪華な生活ができるということな

んですね。その青年はこれから勉強して終わったら今度はラグビーをやって、そのためにまたアルバイトしないといけない、そしてまた勉強する、と。日本の学生と違って多感ですね。目的意識をしっかり持ってラグビーを大学でやってアルバイトして金を稼いで次に何をやるかということ結構、楽しく語り合っていました。

そんなふうにはラグビーは何もヨーロッパ、昔の大英帝国の領内だけではなく、世界でだんだん広まりつつあるわけです。そういう中で、いつまでも大英帝国の旗がはためいているところだけがラグビーの本拠ではなくて、これからは世界の人口の6割がアジアにあるわけであって、そのアジアは今ではまだ日本よりも弱いんですけど、韓国にしても、台湾にしても、中国にしても、香港もイギリスの関係からラグビーは好きですけどね、そういう国々がこれからだんだんラグビーに興味深くとらえてくる時代が来るだろうと思うし、またそうあってほしいと私は思っているんです。

NHKは暇なのかどうか知りませんが、夜になると東京では5チャンネル、9チャンネル、BS1、BS2でやっているのはアメリカンフットボールとバスケットボールと、見たくもないものばかりやっていますよね。なんであんなことになっているのかよくわからない。だったらもっと関西の大学のラグビーの試合を夜でもいいから放映してくれたら我々は喜んで見るのにな、と思うし、ひと頃は花園のラグビーは毎日放送が全部流してくれて、夜11時すぎになると「今日の花園から」という試合をバンバン流してくれた、住友グループがスポンサーをやっていたのに、ここ数年、ぴったりなくなっちゃいました。スポンサーがないからというなら、スポンサーがつくような放送に回せばいいんだけど、毎日新聞は、これはおれのものだといって、なかなか放さないんですね。各県も花園に出る。決勝は、私は石川県ですが、石川でも福井県でも富山県でも岐阜県でも青森でも決勝戦は毎日系の民放でちゃんと決勝戦は放映していましたよ。それも最近はやらない。この間、石川県の協会の連中が「何とかしてくれないか」と来るからかけあってみたら「自分らでスポンサーを探してくれたらやってやる」と。私も意地になって金を集めてやったんです。100万円近くのお金でスポンサー集めて「やってくれ」と

毎日放送、TBS、石川県では北陸放送が決勝だけはやってくれると思ったら、なかなか放送しない。いつ放送するかと思ったら夜中の3時から放送すると。スポンサー料を全部こちらで持って、金をつくってやって、それでも一番空いたところの夜中の3時頃にやる。

だったらNHKは何をしているのかね、皆から視聴料を集めて。なんでアメリカンフットボールばかりや、バスケットボールを見せているんだらうかというと、連中はアメリカに野球を撮りに行っている。日本のNHKをはじめテレビは、松井だの、松阪だの、イチローだの、たくさん稼いでいますから、彼らの野球放送をやると視聴率が高まる。野球がない時は遊んでいる。遊んでいるからついでにアメリカのスポーツを撮る。アメリカのスポーツを流していてもラグビーはないわけです。結局、アメリカンフットボールとバスケットになって、日本の人たちは夜中の2、3時に見ているのはアメリカンフットボールとバスケットボールばかりという、実におかしなスポーツ放送となっているなどって見ているわけですけども。

それで悔しいからラグビーをもっともっと世界に広げたいと思って、我々、日本協会は、国会議員であることよりも、元総理であるということよりも、私は日本ラグビー協会会長であることを誇りに思っているわけです。そうでもなければ大八木さんには「ハイハイ」と言って従わなければならぬ立場であります。一応、ラグビー協会会長だから「こら大八木」と言えるわけで、ありがたいことだと思っております。そんなことが私にできることは何とか皆さんの願いがあるワールドカップを日本に持ってきたらと思って、今、努力しているんです。

今度、世界国際ラグビーボード（IRB）の会長はラバセさんというフランスの方です。フランスのFOC、オリンピック委員会の副会長でおられる大変スポーツ万能な方でございまして、このラバセさんは日本最良でもあります。前回の投票の時、間違いなくフランスは日本に票を入れてくれたことも私は感謝しているわけですけどね。ラグビーの世界にはものすごく古いしきたりがありましてね、こんなことが今の世界で通用するのかなと思うくらい。宗主国があって、ラグビーのワールドカップを最初にスタートさせた時の最初の8カ国がありまして、これ

がイングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランド、不思議にこの4つは大英帝国なんですね。なぜかラグビーとサッカーになると4つになるんです。都合のいい時は4つになるんですよ。派閥が4つあるんですね。自民党みたいなどころがあるんですが、それに南アとフランスとオーストラリアとニュージーランド。この8チームが今でも投票権が2票あるんですよ。日本とかカナダ、カナダも英圏内ですが、1票なんですね。アルゼンチン、イタリーは1票。アングロサクソンが2票ずつ持っている。こんなおかしなルールが今でも世界で罷り通っているわけです。全部で22票か24票あるんですが、この8カ国が16票、半分以上とるわけですから、どんなことをしても勝てないんですね、この連中が仲間になっている限りは。2年前、負けた時、当時、シュノミナというIRBの会長と、終わった後、大喧嘩したんですよ。「国連だってね、中国やインドのように10億を越えている国でも1票だ。タンザニアも1票ですよ。台湾だって1票なら中国だって1票だ。国連だってルールはしっかりしているのに、なんでラグビーだけ宗主国が2票になって、他の国は1票なんだ」。しかもイギリスのマークをつけた国が大英帝国の連中だけで8票あって、それにニュージーランドと豪州が加わって完全に十何票になる。こういうルールが今でもあるんです。ラグビー界にはあるという、まことに不思議なことがあるんです。

つまり、イギリスというのは階級社会ですね。今でも王室があって、ちゃんとサーがあって、はっきりしている。サッカーファンの方には叱られるかもしれませんが、イギリスに行くとラグビーの選手の方が一流とされていて、あまり差別的なことを言うと、いけないんだけど、ラグビーをやっている人でないとイギリスでは評価をされない。そうだよ、大八木さんが頷いてくれないと俺、しゃべりにくい。「そうだ、そうだ」と言ってくれないと。サッカーも確かに多いですが、日本よりもイギリスもフランスもサッカーファンはすごいですけど、ラグビーをやっている連中がイギリスでは軍隊の将校になるのはラグビー経験者でなければだめだと。これは横山さんのおっしゃった話に少し共通してくるものだと思いますが、リーダーシップとか人をうまくまとめていくという才覚はラグー

によって学ばされているというところもあるんだらうと思うんですね。

戦後、日本に自衛隊が発足しましてね、自衛隊の隊技を何にしようかとなって、実は自衛隊の隊技をラグビーにしたんですよ。ところが日本の自衛隊はおかしなところが多くて途中で公務傷害があって、これは公務なのか、公務傷害でないのかとゴタゴタあって、防衛庁の予算は厳しいですから、公務傷害にならないということになって、隊技、自衛隊のスポーツでラグビーを必修にしていたわけだけど、それを出せなくなったわけです。その他にピンタが少しあって、ピンタは今でも、ないとは言えないけど、同志社だってあるんだろ？

〈横山〉同志社はないです。

〈森〉そうか。ここは強く彼は否定していますがね、愛のムチみたいなものです。そんな事件が自衛隊にあって、それからラグビーが隊技でなくなったんですね。柔道だの、剣道だのを学ぶ。それも結構なことなんですけど、剣道、柔道は個人のものであって、全体のチームワークを考えるにはラグビーが一番いいんだそうです。

話は脱線しましたがね、そんなこともあって、私は無性にラグビーが好きですけどね、人生がラグビーで、ずっと位置づけられていったと思っていますのでね、こよなくラグビーを大事にして、あと、そう長くはないので、あと10年くらい生きられれば、ラグビーを生涯の友として最後、全うしていきたいと思って、ラグビーに少しでも奉仕したいと思っています。大八木さんも、あなた神戸製鋼にいたんですよ。神戸製鋼にいれば結構、いいポストになるのだらうと思いますよ。平尾に遠慮して譲ったのかわかりませんが、しかし60歳になれば、どうせ肩たたきがあって、そこから下請けに行くのか、田舎に帰って晴耕雨読になるのか、どっちみちそう長い話ではない。今、いくつですか？

〈大八木〉47歳です。

〈森〉せっかく神戸製鋼という誰もが願っても逆立ちしても入られないような会社に入って、しかも会社のペーペーの社員は社長や会長と話は不可能なんだろうけど、大八木さんは社長や会長にも一目置かれていたと思うよ。あなたや平尾さんはね、と思う。それでも自分のいい地位を捨てて一生懸命に子どもたちにラグビーを

教えようと。そして小さな子どもたちにラグビーを普及させて少しでも子どもたちにラグビーを大事にしてもらいたいということで、全然、儲かりもしないことを彼はやっているわけです。神戸製鋼時代の収入より半分くらいになったんじゃないのかな。以下だらうね、と思う。そんなことをしてまでラグビーを少しでも広めたい。ラグビーを経験させたい、子どもたちに楕円形のボールを持って走らせてやりたいという思いの方が強かったのだと思うんですね。今に「よくやった」と言われて文部科学大臣表彰がもらえるくらいになるだらう。それでもラグビーの方が大事だと思ってくれる、へんな話、バカ人間がいなくて日本のスポーツというのはよくなるんだなと私は思うし、私もそういう意味でラグビー一筋できたから、ラグビーにご恩返しをするのは大事だと思って、今、ワールドカップ招致のために一生懸命努力をしているんです。

大変難しい状況にありましてね、ラグビーだけではなく、スポーツもだんだん金儲けの手段になってきています。もちろん野球もバレーボールもバスケットボールも商業が前に出てきているわけです。ラグビーよ、お前もか、と言いたいくらい、すごい金を必要とするわけです。ラグビーボード（IRB）は4年に一度ワールドカップを開くと、4年に一度開いて協会に入ってくるギャランティを支払う、その金がだんだん上がってきて、今いくらだと言えませんが、企業秘密ではないけど、言いたくないけど、おおよそ100億前後しているということですよ。日本で大会を開くと100億円の金を国際ラグビー連盟に払わないといけぬ。しかもその金はどこから入るか。ほとんどチケット料だけなんです。テレビ放映とか、ありとあらゆるグラウンドの看板を出すスポンサーは全部IRBに入ってくるので日本協会には何も入ってこない。入ってくるのはチケットだけになるんです。そういうことが果たしてできるか。100億円の純益を国際ラグビー協会に納めるとなると1万円のキップを100万人の人に買ってもらうといけぬ。さあ、今、日本でラグビーを好きな人が1万円、ニュージーランドのオールブラックスとワラビーがやるというと、好きな人は1万円でも買うかもしれない。しかし他の試合になったらそれだけ払う人がいるかどうか。

東京、大阪、関西中心、九州でいくつかやらないといかんわけですが、1カ月半、これだけのチームを招聘してやるわけですね。20カ国、5チームで4つのグループ、全試合を仙台でやったり、北海道でやったりすることになるんですけど、その入場券が、それだけ捌けるかどうか、正規のスポンサーがついても看板料は全部国際連盟に行ってしまうのでね。私は考えただけで気が遠くなるので早くラグビー協会の会長を辞めたいと今、思っているわけですけどね。何とか道筋だけはつけておきたいと思っているんです。

そこで国際ラグビー連盟から昨日、帰ってきたばかりだから報告もまだ何もしていないのでホットな話をすると、今、ラグビー連盟は一举に2015年と2019年、二つの年度の大会を決めてしまおうとしているんです。2015年と2019年、いつもは1カ所ずつしか決めないですよ。来年4月に決めるんですが、いつもは2015年度分だけ決めればいいんですけど、今度は2019年度とセットで決めると。その心はどこにあるか。去年はフランスでやりまして、すごく儲かった。私も結構、見に行きましたが、どの試合も8万、9万入る大きな競技場もどこも超満員です。小さくても4、5万ですからね。とにかく入ります、ヨーロッパでは。フランス協会はがっばり儲けたんです。国際連盟もがっばり儲けた。今度はニュージーランドです、2011年は。ラグビーの本場です。本場だけ経済力がない。そんなにグラウンドがない。私も行ったことがあります、メインの競技場はありますが、1回か2回の試合です。それで百何十試合はできないですよ。ホテルがない。素朴な牧歌的なニュージーランドですから豪華なホテルがあるはずがない。2年後だというのに、今もってまだスポンサーが決まらない。今、決まっているのは2、3社だと。コマーシャルをどこに求めるか。日本に頼まざるをえないんですね。東芝だ、NECとかに頼まざるをえないようになってくるんですが、ニュージーランドも日本からとっていったから何となく頼みにくい雰囲気がある。いずれ日本の協会に仲立ちしてくれということになるんだろうと思いますね。と思いますが、国際ラグビー連盟も諦めているんです。ニュージーランドは赤字になるだろうと。そうすると4年間維持する金が入ってきません。その次の会場で、

もういっぺん儲けしないとイケない。ニュージーランドの次に日本では観客が入らないと見ているわけですよ。だからニュージーランドでやったら、その次はヨーロッパに持ってくる。イギリスに持ってくる。そしてイギリスでやれば、またガーッと金が入る。その次に日本だと。そういうと日本は怒るだろうから、日本には2019年を約束するよと。そのかわり2015年はヨーロッパでやることに了承してくれよというのが、どうも戦略のようです、話を聞いていますとね。

争うのは、はじめイングランドと日本かなと思ったら、昨日、ラバセ会長に言わせるとイタリアが強くなってきている。なぜか。いくつかの条件があるんですが、その中の一つに、これはこれからのスポーツ界に大事なことですが、「政府保証」という問題がある。協会ですりだけだけの稼げなかった場合、赤字が出たら、その分を政府が払います、政府が保証してくれないと選ばれないという最低の条件の一つに実はなっている。ラグビーだけではないんです。オリンピックもそうです。2016年のオリンピックも最終的にはIOC、JOCとの約束ですが、政府が支援するか、しないか。日本の場合はそれくらいの資金を集めることはできるんです。集められるけど、もし足りなかったら政府が出しますよというコミットメントが必要なんです。これをこの間、今から数カ月前、福田総理の時だったんだけど、石原都知事と福田総理と私とで話し合っ、それも何とかしないといかんだろうと、基本的には政府保証をする。オリンピックですよ。政府保証するとなっているんですが、財政当局はなかなか、うんと言わないですね。オリンピックが政府保証できたら、次のラグビーはどうなんだよ、次にバスケットボールの大会、サッカーの大会、バレーボールの大会があったら「さあ、その金を政府が保証するのかね」という、全部そこへ拡大していくことを財務省は心配していて、「まあ、オリンピックだけはやむをえないか」ということで切ろうとするわけですが、私はこの際、なんでオリンピックだけなんだ、じゃあラグビーもそうしろよと言えるのは、その前に世界水泳選手権があって、これはローマに負けたんです。これはなぜ負けたか。政府保証がなかったからです。イタリアはちゃんと政府のスポーツ担当

大臣が、決める総会に来ていましてね、政府がきちっと保証します」というコメントが出ていました。それで日本と争ったんだけど、古橋広之進が、もぐもぐと言っているうちにイタリアに決まっちゃったということがあるんですね。

最近のスポーツは国をあげてそういうことになる。スポーツ立国というのはそういうことではないんですよ。そういうことではないんだけど、世界はある意味では平和になっている。その意味から言うとスポーツの国際大会ができるということであって、国際大会がある意味では、その国にとって大きな外貨を獲得できる最大のチャンスであるということも間違いないわけですね。そういう意味から言えば政府が保証してあたりまえじゃないかというのがヨーロッパの考え方です。ところが今度、国際金融で世界中がこうなってしまうと、そんなもの、国が保証するどころか。イギリスも手を上げていたけど、残念ながらイギリスはブラウンさんがノーと言った。日本もまだはっきりしませんが。どうもだめだと思ったら、実は昨日、ラバセ会長が実はイタリアがちゃんと政府保証すると政府が言ってきたというんですね。そこで俄然、イタリアが有利になってきた。ローマはその前の水泳大会もそうですが、案外、簡単に政府が保証してしまうんですね。そういう意味で日本がまだ厄介な敵を持ってきたことになるわけで、なかなか大変だなと、実は思ってた昨日、帰ってきたわけでありませう。

ですが、スポーツの国際化というのはとても面白いので、今、同志社はどうか知りませんが、関西の大学にも結構、外国の選手入っているんじゃないですか。

〈横山〉入っているところもあります。

〈森〉強くなるには外国の選手を入れることが一番いいですね。高校はその傾向が強くなりました。私の選挙区は石川県の加賀の方ですが、昔からラグビーはあまり強くない県で関西協会から結構バカにされていたんです。ところが一生懸命頑張って鶴来高校がいい試合をするようになったんですが、突如、石川県がラグビー不毛の県だと思ったのか、山梨にある日本航空学園高校を分校である第二高校を石川県につくったんです。この日本航空学園高校は野球は強いですよ。よく甲子園に出てきます。JALの学校かなと思うけど、これは野球は強いがラグビー

は勝てない。ラグビーは山梨で斐川高校が強い。何とかしてラグビーで花園に出たいと後継者は考えて、石川県が空いているということで能登空港ができて1日、2、3本しか飛行機が飛んでこないから滑走路が空いているので、そこを使おうとなって石川県の能登空港の脇に日本航空学園第二高等学校をつくって、そこにすごいラグビー場をつくって、ラグビーを全部、能登に持ってきた。俄然強くなった。ここのところ3年連続して花園に日本航空学園第二高校が出ているんです。

もう一つ強くなったのはトンガの留学生をたくさん入れた。私の選挙区の高校、鶴来高校はこの後援者の婦人部の連中が文句を言うんですよ。「先生、可哀相じゃないか、うちの孫が。あんなデカイのにぶつけられたら、怪我ばかりして困る。ああいうものを入れて強くなるのはルール違反だ。そういう高校生に外国の選手を入れるのは、やめさせてください」。おばあちゃん、必死なんです、孫を花園に出したいばかりに。そうおっしゃるから「しかしね、世の中でそんなこと通っていたら松井も松阪もイチローも皆、追い返されちゃうぞ」「あれは野球だからいいんでしょ」「野球だからいいと言って、ラグビーだって同じじゃないの。そんなことを言うんだったら相撲はどうなる？ 横綱も大関も全部外国人じゃないの？ 全部いなくなっちゃいますよ」。本校出身の土佐の海君もしっかり頑張らないから、いつまでもいつたり来たりしていますよね。だんだん日本もガッツがなくなっているわけです。それは大学から入ってくるのが多くなったから。大学出が4割くらいいるんじゃないかな。大学出はなかなか横綱にならない。大関まで行くけど、1場所ももたない。石川県にいる出島もそうだし、栃の灘もそうだし、無双山もそうだし、土佐の海も。肩にこぶのあるのも大学出ですよ。大学の選手が相撲に入ると、確かにある時期はポンポン幕内までいく。その中で強いやつは三役に入る。三役をキープできない。大関に行ったらまた下がってくる。これだけ大学の力士が多いのに大学の相撲部から大関に入って横綱になったのは、ただ一人しかいない。先生、誰か知っていますか？

〈新川〉日大を出た輪島。

〈森〉石川県です、あれは。輪島君だけなんで

すよ。輪島だけが横綱になっている。あとはいかにだらしなないか。サラリーマンになったからですよ。昔は親方から金もらってやっていた。それが改善されて十両以上が幕内力士。これが給料をもらって月140～150万円もらっているでしょう。幕下から三段までは稽古料として協会が親方に部屋に入れて渡して自分の判断で分配する。自分で稼いで給料としてもらえるのは十両以上になるわけですね。相撲の十両と幕下と、どう違うか知ってる？ 十両をわかっている人、いますか？ どう違うかわかる？ 同志社も相撲部あるでしょう。名称は関取だ。実質は何が違うか。簡単じゃないですか。鬘が違う。大銀杏は幕内に入ってからでないと結っちゃいけないんですよ。幕下にいくとザンギリ頭を結ぶだけなんです。もっと大きな象徴的なものがあります。回しは後援者によって違います。もっと大きいのは羽織袴の着用が許されるかどうか。幕内力士は羽織を着て、袴をはいて堂々と歩く。幕内を落ちたら途端に着流しです。これは全然違って来る。高見山は実に強かったけど、怪我に泣いて十両に落ちた。その時になぜ辞めたか。羽織袴を着用して刀をさせた身分を全部とられて、また着流しの浴衣1枚になることは屈辱だと考えて辞めたんですね。本当は彼など初代の外国人横綱になれた人だったんだけど、当時の相撲界はまだ外国人には冷たかった。そうすると大学出の連中はサラリーマンと同じで140～150万円毎月稼いでいれば、ちょっと負け越しても、ちょっと下がるだけ、また頑張ると上に上がる。また下がる。これはエレベーター力士で上がったり、下がったりしていますが、給料は変わらない。たまには横綱をやっつけて金星をとったりして給料に跳ね返ってきて賞金がもらえる。そういうことばかりやっているから、大関になって、大関在位33場所で優勝するとか横綱になるための内規がある。そういうものをガッツでやっていこうという気力が日本の相撲取りにはない。モンゴルやグルジアとかロシアの人たちがそのお金がもらえたら家が建つ。すごいガッツ、すごい気迫ですからね。朝青龍は文句を言われていますが、いつ帰ってもいいように企業に投資してモンゴルに銀行まで持っていますよ。そんなことをしているから相撲が本気にならないんですよ。重役会議があるというのは飛んでいっているから本気にやらな

い。これ以上批判されたらバツと辞めちゃう。辞めてもちゃんと食べていける。

彼らは目的意識をすごく持ってやっていますから日本の学生諸君とは大分違う。日本の相撲に引き抜かれて多少の支度金をもらって相撲界に来るけど、横綱になってやろうという気持ちが強い。こういう気持ちは日本の今の学生諸君にはないですね。政界でも、国会議員にはなろうということで、小選挙区制になったから自民党だけではなく、民主党も結構出るけど、議員になって総理大臣になろうという人は、あまりいないですよ、見てみると。今の自民党なんて払底しちゃって、太郎ちゃんの後もいなくなった。総理大臣になって日本国をどうしてやろうかという気構えのある人たちは、相撲だけではなく、政治の世界もそうだ。大学もそうじゃないですか？ 教授までやろう、よし学長になって、この大学をどうしようかという気構えを持っている人はいるだろうと思うよ、同志社なら。いると思うが。日本の国のどこのレベルも皆、そういう気概がだんだんなくなってしまったのは、そう不自由なく暮らしている、これだけの国になってしまうと、もう一つ汗かいてやろうという心構えが欠如してきているのかなと。

今、申し上げていることは総論です。今、申し上げていることはラグビーの話しながらスポーツ界全体に、いや日本全体についての総論だろうと思っているんです。そこで次のテーマに入りますがね。これはよく言われていることだし、大学の先生方から学んでいることだと思いますが、これからの100年間をどうするかということでしょうかね。過去の20世紀の100年というのは「栄光と悔恨の100年」だったんです。栄光と悔恨というのはね、福田赳夫先生の演説の中での話で、なるほどな、と思った。つまり科学技術がこの100年でどんどん発達した。家庭の台所にある冷蔵庫、洗濯機から始まって車もすべて科学技術が、どんどん人間の知恵以上のことをやるようになってきた。これは科学技術の発達なんです。科学技術の発達が丁度20世紀中頃からなんです。中頃から何が科学技術を牽引してきたかというと兵力なんですね。爆弾です。弓刀から鉄砲、機関銃、大砲と変化していくわけですが、そのうちにミサイル、原爆となっていくわけですね。科学技術が発達す

ればするほど大量殺戮兵器になっていった。大量殺戮兵器になっていくということは戦闘員が相手をやっつけるのではなく、背後にいる一般市民、お年寄り、女性、子どもに爆弾を落とすことによって相手にダメージを与えていくという戦闘を、我々日本も体験したけど、その前にヨーロッパも経験しているわけですよ。大量殺戮兵器で相手の国を撃ちまかしていくというのが20世紀前半、それが続いたはずですよ。広島に落とされた、長崎に落とされた原爆というのは「ああいうことをやっちゃいかん」と誰もが皆そう思っている。我々アメリカの政治家と会うと、その話になる。

あの頃は僕はまだ子どもの頃だったけれども、隣の富山にボンボン焼夷弾が落とされて福井にも焼夷弾が落とされていた。このまま戦争を続けていたら日本中、全部人がいなくなっちゃったでしょうね。戦地から帰ってきた人たちは、自分の国のあまりの見すばらしさに、どういう思いで帰還することになったか。そういう意味では原爆、水爆というのは科学技術の粋をいくものなんだけど、結局、幸か不幸か、それで戦争がおさまった。そして二度と戦争をしちゃいかん、そこから次の第二次世界大戦以後の戦争になったら、大戦争になったら必ず原子力を使う戦争になっていくだろう、それは結果的に地球の破壊に通じるだろうという、これは、どの国もそういう意思だった。今回のノルウェーで決められたクラスター爆弾だってやめようとなった。あの爆弾を一発落としたり周りに弾は散弾して多くの子どもたちや多くの市民が犠牲になるものはやめようという空気にだんだんできてきているわけですね、世界は。20世紀は科学技術というものが発達することによってものすごくひどい戦争が行われた。結果としてこの科学技術によって戦争が抑制されたということになるんですね。人間というのはものすごく利口かと思えば愚かだし、愚かだと思えば利口だということになる。

さあ、21世紀だ。この世紀をどうするのか。世界から大きな戦争をなくそう。これは皆の気持ち。アフリカに類発しているような、今度のインドのテロのように、時々南米あたりの諸国に起こるような紛争、対立を除去していく。除去していくために国際社会は協力していかないとやらんということになるでしょうね。本当に

21世紀は繁栄して平和であってほしい。これは誰もが願うことだと思う。平和であればスポーツ大会が盛んになる。かつてのベルリンオリンピックもそう、1940年、東京オリンピックを最初、決めた、嘉納先生が。それも断らざるをえなくなったのは戦禍の最中に入ってきたからです。かつてソビエトに対してモスクワオリンピックを西側がボイコットしたということがあるように、世界大会が開かれる、オリンピックが開かれるということは世界が平和であるという証左になるのであって、スポーツをどんどん盛んにし、スポーツをする人たちをどんどん作りあげていくこと。そのためには横山先生がおっしゃったように、国内における人々の考え方、協力体制も大事。もう一つは国際社会の中で平和な社会を維持していくことについてもスポーツというのは非常に意味のあるものなんです。

私が学んだ大西哲之助さんという早稲田のラグビー部の監督が、よく話をしていました。人間というのは、所詮、戦う動物だ。ライオンだってそうだ、ヘビだって、トラだってそうだ。何のために戦うか。自分のこともあるが、我が子のため、我が妻のため、家族のために戦って餌をとってくる。どんな辛い思いをしても餌をとってきて子どもに食べさせる。これは動物の本能だ。それがもう少し大きくなると利益のために資源を獲得する、資源を獲得すると丸ごと領地も獲得するという20世紀の戦争につながっていったわけであって、今は国際社会の中でお互いに協力して話し合って資源を有効に分かち合っていくという時代に今、変わってきていることになれば、当然、人間もお互いに劣性、優性いろいろあるだろうけども、また肌の色の違いはあるだろうけど、それを乗り越えて協力体制をつくって国際社会を構築していくという、いよいよそういう時代に入っている。21世紀はそういうことのスタートに立っているんだと考えていけば、それは正しいことだと思っているんです。

そうするとこれからの100年間をどういう秩序でやっていくか。一つは国際社会であることは間違いない。相撲の話もした、野球の話もした、とにかく国際社会の中で日本人が日本人であることに対する誇り、日本人として評価をされる、そういうことが大事なのであって、そ

れは教育に携わる皆さんに一番考えてもらわなければならないことなんですね。どの大学にも今は留学生がたくさんいる。中国は一時期、日本に留学生を出すということが流行りだったんですよ。今から20年近く前、文部大臣をしていた時、中国に行って厭味を散々言われました。「日本になんで大学生を出さないんだ?」「日本に行ったら悪くなって帰ってくるから。全部パッケージにして寮で監督しないと日本に行った青年は皆、日本の学生たちによってパチンコだの風俗だの、あちこち引っ張り回されて悪いことばかり覚えて勉強しないで帰る」と当時、言われてたんですから。今もそうかもしれない。日本に行っても勉強にならない。墮落して帰るだけだと。残念ながら言われていたことは事実だし、思い当たることもたくさんあると思いますよ。遊びの大学、レジャーの大学、娯楽の大学、単に就職の便法にすぎない。それは今の大学生もそう考えているでしょう。

しかし世の中ガラッと変わったんですよ。ソニーに行こうと、東芝に行こうと、10年もたないんですから、今、会社は。人間性を見て、どんどん変えていく時代になります。昔は京セラに入れば60歳になるまで我慢していれば食っていける時代だったかもしれませんが、もうそんな時代ではないでしょう。勉強だけして試験だけ受け、学校から出した設問に答えた、それだけ採ったら生涯クビ切れなかった。どういう人間であるか、どういう人間性であるか、どう人の上に立てるか、ハンドリングがどうか、そんなことまで全くわからないままペーパーテストやっていたのは事実です。しかし今は違いますよね。3年生の方います? 4年生? もうニコニコ顔だから就職決まっている。そっちはどうだ? 皆、決まった。おめでとう。いい時代だね。今年だったら終わりだったよ。世の中、そういうように変わるんだから。しかしあなた方、試験やって大学に入るみたいなペーパーテストをやらされた? ほとんどなかったはずですよ。4、5、6回の面接ですよ。だんだん振り落として人物を見ていく。最後になったら7、8人にして社長や重役の前でディスカッションをさせる。正しいことを言っているかどうかは、どうだっていいんで、どういうことを当意即妙に答えられるか。どういう対応ができるか、どういうハンドリングができるか、そういうこと

を見るというのが、今の会社のやり方でしょ。その関門を超えていかないと、なかなかいい会社に入れないという時代が来る。

しかし、そんなむりをしてまで入っても、会社も、そう楽しくもないし、意味もないことだと僕は思っている。大八木さんを真似たらいいと思います。大会社に入ってもサッと去る勇氣、それよりもっと価値のあるものがあるはずだということを彼は選んだんだろうと思います。私も子どもの頃から早稲田大学に行ってラグビーをやりたいというのは小学校から思っていて、幸い、そこまで到達したけど、1年生で辞めちゃいました。そのことはとても恥ずかしかった。とても辛かった。でも大西先生に言われた。「森君、そんなにラグビーに対して、すまんと思うな」。僕は「ラグビーを辞めるんで大学も辞めます」と言いに行ったら張り倒された。「ラグビーなんてつまらん、陳腐なものだよ。ラグビーを辞めて大学も辞めるのか? バカもん。そんなに思うなら、そんなに悔しかったらラグビーを見返してやれよ。お前の仲間よりも偉くなって、ラグビーをやってないから、こっちの方がよかったという人生を歩んでみる」と私は尻を叩かれて無我夢中でやりました。

あの早稲田のラグビー部から外務省に行った奥君という参事官、イラクで撃たれて死にましたけど。彼だって、そうだった。イラクから誰も日本人がいなくなった。日本の大使もいない。バクダットは空っぽ。彼は国連政策課長で私が総理の頃に仕えてくれた。「先輩が総理を辞めるなら、私は他のことをやりますから」「どこに行くんだ?」「ロンドンへ行ってください」「もういっぺんロンドンに行って、またラグビーをやるのか?」。前にロンドンに行ってケンブリッジかなんかでラグビーをやっていた。「またお前はラグビーをやりたいのか?」「違います。イギリスに行って、そこから長期出張でイラクに行きます。イラクで子どもたちの世話をします。一人も日本人がいらないというのは恥ずかしいと思いませんか、先輩」「そらそうだな。だけど危ないぞ」「大丈夫です。私は子どもたちのために日本人を代表してイラクに行ってやってみます」。そう言ってイラクに行った。そして撃たれて死んじゃった。僕はショックだった。「行け」と言ったのは私だった。彼は外務省にレポートをどんどん出してきたけど、外務省だ

けではなかった。大学のラグビー部の後輩たちにも清宮監督や学生たちにどんどん出した。その文章を何枚か見せてくれたけど、本当に「俺はイラクのために死ぬんだ」ということがひしひしと伝わってくる。「今に平和になる、必ず平和になる。平和になった時は俺の顔を覚えてくれていて日本人はこうしてくれたということだけを何とか子どもたちに植えつけておきたい」。彼はこう言って、本当にはかない人生を終えちゃった。本当に可哀相でしようがない。でも彼はそれで本望だと思っている。その彼もラグビーを途中で辞めて「外交官になりたい」と言って大西さんのところに来て、大西さんから「よし、わかった。じゃ、ラグビーを辞めて大学はそのままでやっていいから、しっかりと一流の外交官になれよ」と激励を受けた。それで彼は、そういう人生をたどったんです。

私もそういう意味で途中で挫折したけど、ラグビーのおかげで今日、こうあるんだと思っている。もしあの時、辞めていなければ、大八木さんと同じようにラグビー部の指導ができたか、田舎にいて田んぼでも耕していたかもわかりませんがね。しかしラグビーを通じてわずかながら得た体験と精神力を、これは自分の政治生活の中で使ってきたなど、そう思っているんです。

国際社会というのは人間そのものだと思う。人間力、国際社会の中に生きていくためには日本人という人間力を一番大事に考えなければならぬ。さあ、子どもたちを見てどう思いますか？

皆、素直で、皆、明るくて、皆、いい子です。でも一つ何か足りない。何が足りないのか。礼儀でしょうね。挨拶ができないでしょう、今の子どもたちは。なぜできないか。学校で教えないから。なんで学校で教えないか。先生がわからないからです。教わっていない人たちが教壇に立ってるんですから。教えられるはずないじゃないですか。子どもの国際大会の試合、やったことありますか？ 韓国の子どもと日本の子どもを混ぜて同じセーターを着せて一緒に遊ばせて、どっちが日本で、どっちが韓国か、なかなかわからない。しかし号令をかけるとすぐわかります。気をつけと言うと、すぐわかります。気をつけと言っただけで韓国の子どもたちはきちんとやる。日本の子どもはどうか。右向け、右。日本の子どもたちは、こう。笑い話じゃないで

すよ。今でも子どもたちを集めているんな行事をやっています。笑っちゃいけないですよ。笑うようなことをしたんじゃないですか。どうしてきちっとしてあげないか。他の外国の子どもたちも、きちっとやりますよ。なぜ日本の子どもだけでできないか。教えないから。親が教えない、学校の先生が教えない。社会が教えない。教えないのはなぜか。教えられないんです、自分が教わってないから。今、そういう世代が先生なんだもの。先生が教室に入られる。授業を始める。生徒はパッと立ちますか？ 立たないでしょう。こんなことは外国ではないですよ。カナダの方も。必ず教授が入ってくると生徒は皆、立ちますよ。

アメリカの大統領が記者会見をやる。大統領が入ってくる。報道関係も皆、立ちますよ。記者が敬意を払って立ちますよ。そして終わると批判はしますが、大統領が去る時は全員立って拍手をします。これがマナーですよ。ラグビーだってそうです、野球だってそうです。相手の学校を讃える、勝った方に負けた方は讃える。そういうことが今、日本の子どもたちにできないじゃないですか。日本の新聞記者だけ、総理大臣の前で足を組んでしゃべっている。そんなに偉いのかと、お前は。新聞だから。新聞はそんなに偉いのか。日本はそんなに偉いのかと言ってやりたくなるくらい、私もそういう経験をしたから。俺の悪口ばかり書いていたけど、それは構わない。中身は構わない。しかし人間として。教壇というのがある。今の学校、教壇がない。先生と生徒は民主主義で平等だ。人間としては平等だ。しかし教えてもらう側と、教える側に差があっていい。大八木先生と教わるラグーとは差があっていいはずでしょ。教えてもらう。これから1時間半、先生の講義を聴く。教えていただくんだという気持ちがないといけない。だから先生が入ってきたら全部立ち上がる。礼はしなくても、それくらいの敬意を表する。先生、これから学生が立ち上がらなかつたら「今日は終わり」と言って帰っていい。先生方もそういうことに溶け込んでしまっただけじゃないですよ。間違っているんだから。先生の講義を聴く時は立つ。これから先生のお話を承りますという礼儀があっていいはずなんです。

そういうことが残念ながら学校でも社会でも、できない時代に入ってるんです。だけど国

際社会はどんどん進んでいる。国際化ということはいろんな意味で国際人が交わることでもあるが、同時に日本人として尊重される青年たちを育てないといけないんです。頭がいいか悪いか、学力があるかないか、それは本人の問題です。本人がいくら頑張ってもだめなものだめです。努力することも大事だが、DNAもあるでしょう。そういうことの嗜みは国際社会の中になっても、絶対に必要なことなんです。国際社会への対応としてぜひ、すべての人たちが、せめてスポーツを通じてやってもらいたいと思うんです。お宮さんの前、お寺さんの前、そこで後ろを向いて、神社に腰掛けられますか？ お宮さんには敬意を表して仏壇に対しては礼をつくすことは人間として当然のことでしょう。かつてケネディの弟、ロバート・ケネディが早稲田大学に来ました。時々机に腰掛けてしゃべることがある。アメリカ人の特徴です。礼儀はやっていますよ。それを見て早稲田の総長が「これは教壇だ、あなたが腰を下ろすのは間違っている。ちゃんと立ってしゃべりなさい」とおっしゃって「必要があれば椅子を持ってきましょう」と。ロバートは「俺が間違っていた」と謝ったそうですけど。そういうことの一つのけじめ、しきたりは絶対に必要です。この道路を挟んだら御所だ。御所はもともと天皇陛下のおわすところだ。同志社大学の構内とは違う。違うんだということは学生諸君にはわかっているはずですよ。すべてそうあらねばならんなど。スポーツで教えない限り、無理だなど思っているんです。

もう一つ大事なことは少子化と高齢化がものすごいスピードで進んでいますね。去年だけで日本の人口は7万人減りました。このままいきますと2050年で間違いなく1億人を切る。9,500万人になると言われています。その後100年たちますと5,000万人になる、日本人の人口は。5,000万人になったら受験は楽だよ。大学もガラガラだ。その代わり日本人の活力はどうなるかを考えなければならぬ。おそらく日本で一番困るのは人の嫌がる仕事を進んでやる人がいなくなることで。警察官、看護師、介護士、給料が安いからだけではいいです、きついからです、厳しいからです。消防士、自衛隊もそうかもしれません。どんどん辛い仕事は辞めていく。現に日本の農業の自給率を高める云々というけ

れども、いくら手当てをしたって農業を継ぐ奴はいないんです。そんな泥だらけの中に入ってやるのは嫌だというわけです。団塊の世代が東京や京都で会社員をして帰ってくる。田舎はいいと言って畑ごと、田んぼ仕事をする人も出てきましたけど、それでは経営は成り立たない。4町歩、5町歩ではできない。10町歩、20町歩の田んぼが必要だ。それだけの田んぼをやるには若いヘルパーが必要なんです。若い奴はやってくれないでしょ。少子化になると。今からそういう問題が出てきている。

当時は3Kといわれた。きつい、きたない、危険という仕事は嫌がってやらないということになる。誰がやるんですか？ 現に看護師とか介護士はASEANの国から来るように努力していますが、それでもいろいろ問題があるんですね。看護師を呼んでくると看護協会は、それは困るということになるし、それだけの国が入ってくるといろんな問題が起きてくる。国籍法が改正されました。賛否があると思うけど、フィリピン人が日本人男性と結婚して籍が入ってなかった。子どもはフィリピン人になった。帰らなさいと言われて、テレビで「私は日本で生まれて日本で育っているのに、なぜフィリピンに帰らないといけないのか」とボロボロ涙を流していたのを見たでしょう。可哀相に何ということをして日本の法務省はするんだ。おいてやればいいのにと思うけど、法が許さない。改正しました。改正すると、必ず法律は悪用する奴が出てくる。偽装認定が出てくるかもしれない。外国の人たちがどんどん入ってくる。人間ですから恋愛感情が生まれる。当然のことでしょう。その時、子どもがどうなるか。そういうこともあるから日本はそのことにあまり触れなくなかったから、今まで狭い考えでいたわけだけど、もうそうは言っておられないでしょう。

これだけ少子化が進んでいく。特に去年7万人減ったと、人口が増えたところがあるんですよ。65歳から上、前期、後期と言われる高齢社会の方々が増えているんです。70万人くらい増えている。0～15歳、税金を払う義務がないところが減っている。困ったのは15～60歳まで税金を納める層が減っている。そして65歳以上の人がボーンと増えている。これが日本の人口構造ですよ。これから10年でどうなるか。これも大変な問題になってきます。解決は二つあ

る。一つは外国人を自由に入れることでしょうね。もう一つは夢がある。ロボットがその役割をしてくれるかもしれない。今にロボットが田んぼに入って稲刈りしたりするロボットの研究をやっているでしょう。担い手がないから。そういうこともやらざるをえなくなる。それも楽しいかもしれないが、だんだんそうなる人間は科学技術の中に溺れます。今の子どもはメールをやっている、知らない人と会話を重ねて、不幸な出来事になることが多い。皆、科学技術です。

科学技術はどんどん人間を退化させていくかもしれない。とても怖い社会が来ると思う。そういうことをはね除けて人間として人間らしく生きていく。3KのKではなく、厳しくても、苦しくても、心が通い合う、新しい産業を求めて若者たちを鍛えていかなければならぬのだろうと、僕は八木さんに、それを期待しておきたいと思います。3Kを逃げちゃいけない。厳しいことに耐える、苦しいことに挑戦する、そして友だちと互いに助け合うことによって心を通い合わせる。その3つの新3Kをね、ぜひスポーツの世界でやっていってもらいたいなと思っています。

脱線、脱線また脱線をしてしまいましたが、私の時間はこんなところだと思いますので、私は先に出ますので、後は問題点を先生方にぶつけてください。きっと立派な回答をしてくれるだろうと思っています。

要は一番私が申し上げたかったことは、豊かな人生経験を子どもたちに与えてやってほしい。そして子どもたちが感動を覚えるようなことをさせてやってほしい。跳べなかったのが跳べるようになる。走れなかったことが走れるようになる。泳げなかったことが泳げるようになる。その感動、今の子どもたちに感動を与えてないんです、大人は。ボタン一つ押せば何でもできる時代に入っている。自分で努力して感動する、タックルして八木さんをひっくり返すという感動、僕にだって、できたじゃないか、そして挑戦をする、到達させていくことを、ぜひ八木先生、頑張って、神戸製鋼の給料の半分もない分を日本ラグビー協会で持ってあげたいくらいだけど。それは別として、大いに先生に頑張ってもらっていて、多くのスポーツ、何でも好きなものがたくさんありますけどね、ラグ

ビーはすべてのスポーツを折り込んでいるようなスポーツに思えてしょうがないんでね、ぜひしっかりと子どもたちに感動を教える、スポーツを教えることに、今の大人たちが努力することをお願いをして、私の講義じゃないか、講演だな。講演です。ありがとうございます。  
〈横山〉どうも先生、ありがとうございました。それではご退場されますので、もう一度拍手をお願いいたします。

スポーツと京都づくり

山田啓二（京都府知事）

〈横山〉森先生が熱弁を振るわれたんですが、時間を間違われていたみたいで、45分間でお話をというのを45分までしゃべらないといかんと思われたようで、その間、山田先生にお待ちいただきました。山田先生は次のご予定が入っていますので、約20分間、ご講演いただいて、明日、政策学部の方でシンポジウムがありまして山田先生もご出席されますので、続きは明日また聴いていただくということにしまして、ご了承いただきたいと思います。それではお待たせしました。よろしく願いいたします。

〈山田〉いや、びっくりしました。私も時間を間違えたのかなと思ひまして。でも、これだけゆっくりと元総理大臣のお話を聴けるといのは、なかなかないから、聴いている人からすると得かなという感じはしております。私の方は手短かにいかないといけないかなと思っておりますので、そのあたりはご了承いただきたいと思ひます。

「スポーツによるソーシャル・キャピタル形成の可能性」ということで、私自身、実は今、選挙2期目、知事を6年少しやっていますが、最初の時からソーシャル・キャピタルという問題をぜひとも行政の中で本格的に導入したいなと思ひまして、当時はマニフェストという言葉が、まだ定着していなかった頃ですが、積極的にそういうものを入れていく、2期目の公約におきましては全面的に「ソーシャル・キャピタルの形成」というものを自分の行政テーマにしたいなと思ひ、ただソーシャル・キャピタルと言っても何のこっちゃ、という話だったと思うので、少し泥臭い言い方になったんですが、絆、「社会的絆づくり」を採り入れるというこ

とで「15の絆づくり」を自分のマニフェストの中心に据えました。それ以来、ソーシャル・キャピタルづくりを自分の施策の中に全面的に出してまいりまして、そしてすぐに、その中でとりかかりましたのが「地域力再生」という事業でした。

当時、国の方は地域再生と言っていました。地域再生というと何となく道路をつくり、ハードをつくりというイメージがあったので、私は地域再生という言葉ではなく、そこにある人の力を高めていくという意味で「地域力再生」というのを自分のテーマとして2年前の予算で重要課題として掲げさせていただきました。都道府県で地域力再生という言い方を前面に押し出したのは京都が初めてだと思います。ただ地域力再生というのは難しいですよ。地域力と言っても何のことかわからないし、絆と言ってもわからない。しかも行政が進めていこうとすると、一つ間違えると、くさい事業になってしまうので、やり方が難しいなと思ったんですが、とりあえずは3億円規模の「地域力再生プロジェクト」の補助金をつくりまして、それに市町村からも2億円出していただきまして、宝くじのお金から出していただいて、5億円の交付金の制度をつくって、そして今年で2年目ですが、プロジェクトを始めたところでもあります。

なぜソーシャル・キャピタルが必要かと申しますと、今の日本にいろいろ問題が起きています。この問題は絶対避けて通れない、つまり最近では、秋葉原でああいう悲しい事件が起きました。新聞を見ると「人を殺したくなかったから殺す」とか、インターネットを眺めてますと不満というのか、自分の置かれている環境に対して「社会が悪いんだ、人が悪いんだ、あいつは何としても許せない」という文字が、そこら中に連なっている現状があります。それで無茶苦茶、社会が悪いかという、私もボランティアの子どもたちとよく会うんですが、すごい子どもたちも一杯いるんですね。地域で頑張っている人たちも一杯いる。なんでこんなに差が出てしまうのだろう。なんでこんなに階層が分かれてしまうのだろうという疑問を持つ時に、どうも人をつなぎとめていた社会基盤が壊れてきて、そこから落ちこぼれてしまった、そこから疎外されてしまった人に対する救いとか、そうしたものに対して、今の世の中は非常

に弱くなってしまったのではないかと思います。

昔、私たちが貧しかった頃には農業を中心に社会を営んでいた頃には助け合わなければ生きていけなかった。農業自身がそうですよね。今みたいに田植えから収穫まで全部機械でできる時代ではありませんから皆が助け合って、今日はこの田んぼ、明日はあっちの田んぼという中で皆が助け合う習慣を持っていた。「お裾分け」とか、そういう言葉が生きていた。僕らまだ小さい頃には調味料がなくなったら隣の家に借りにいくのはあたりまえだったと思うんですね。電話だって、私、まだ覚えてますが、小学校の頃は電話のある家に借りにいっていた。もう少し遅ればテレビを見に行っていた。皆、互いに支えあって、貧しいけれど、人と人とのつながりができていた。でもそれが豊かになってくると、全部自分の世界に閉じこもってしまう世界が生まれてきましたし、工業社会というのは地域と人間とを必ずしも結び付けられない社会になってしまっている。

核家族化が進展して、ますます孤立化する家庭が増えてきた。児童虐待の増え方というのは数字を見ると恐ろしくなります。右肩上がりもいいところ、45度の線で上がっていくくらい児童虐待数が増えている。そうした中で子育てをしているお母さん方に聞くと、よく言われるのが、団地の中でお子さんと向かいあっている。子どもが泣く。夜、両親は遠くに住んでいる。隣の人は何をする人か知らない。頼る人もいない。子どもが泣く、どうしていいかわかんない。そうなるのと、思わずおかしくなって、子どもを叩きたくなるというようなことをおっしゃっていたお母さんがいましたけど、まさに人と人とのつながりが、うまくつけれない時代において、いろいろな問題が顕在化し、そして子どもたちに対しても、つながりのない中で、コミュニケーション能力が失われる中で、人と十分につきあえないまま、だんだん大きくなってきて疎外感だけが募ってくると、もう悪い循環が吹き出してくる、そういう時期に今、来ているのではないかなと。

たとえば京都府の統計で見た時に、犯罪の統計が一番びっくりしたのは、何ととっても器物損壊がものすごい勢いで増えてきた。これは10年で2倍とか3倍ではない。20倍、30倍に増え

たんですよ。最初に警察に行って「あんたら、予算とるために誤魔化して数字を増やしているんじゃないか？」と聞きにいったくらいですが、「我々、統計手法は全く変えておりません。でも増えているんです」。落書き、公衆トイレの鏡を壊したり、交通標識を折り曲げたり、こうした犯罪が無茶苦茶増えている。

「割れ窓運動」というのを京都府で頑張っています。割れ窓運動とは何かと申しますと、ニューヨークでジュリアーニさんが市長だった時、強盗はものすごく多いわ、強姦は多いわ、世界でも最も危険な都市と言われたニューヨーク、その時、ジュリアーニさんがやったのは強盗や強姦に対する対策ではなく、割れた窓をなくしましょう。ニューヨークの場合、ハーレムとかに行きますと落書きが多い、窓は石で割られていて、それをベニヤ板で塞いでいるという、どうしようもない状況があった。割れ窓をなくしましょう。警察官を増やして窓を割る連中をつかまえましょう。強盗や強姦ではないですよ。小さな犯罪をなくす運動をしましょう。街の人も街をきれいにする運動をしましょう。そうしたら強盗や強姦が50%以下に減ったんですよ。つまり凶悪犯罪というのは決して突然出てくるのではなくて、カビが生えるところにダニがわくように街に出てくるのがそもそもの凶悪犯罪だと。まずカビを生やさなければダニは出てこないんだということを実践したのがニューヨークの割れ窓運動です。

この前、錦の商店街にいったら落書きを消してきました。消すんじゃなくて、上から塗るんですよ。同じ色のスプレーを上から塗る。後で気がついたら自分の服に一杯ペンキがついていまして落書きを消しにいったのはいいんですが、自分が落書きだらけになったんですけど。それは誤算でしたが。そうやって街をきれいにしていくことによって、一つひとつ小さな犯罪がなくなっていくという運動を展開しておりますけど、まさにこうした社会のつながり、社会に対する小さな問題を解決していくことが社会全体をよくしていく、この運動こそが、行政にとって一番基本として展開していかなければならない運動だなというふうに思って、地域力再生、ソーシャル・キャピタルの事業を今、一生懸命進めています。

それで一番真先に思い出すのは、大八木先生

がそこにおられるんですが、「スクールウォーズ」の世界ですよ。私どもの世代もあのテレビドラマを涙ながらに見ていて、頭の中に大黒摩季さんのアイワールという声が響いてくる。大八木さんの顔を見ると、すぐに出てくるんですけど。まさに荒れていた学校がスポーツを通して絆をつくることによって立ち直っていく物語を私たち感動的に見たのを思い出します。ソーシャル・キャピタルというのはいろんな言い方がありますが、アメリカで最初にソーシャル・キャピタルが問題にされたのはボーリングに一人でいく世代が増えたということが説き起こしたんですよ。昔は皆、家族でボーリングに行っていた。アメリカでは今はボーリングは一人で行く。確かに日本だって一緒なんですよ。今、ゲートボールをとうとうグランドゴルフが抜いてしまいました。ゲートボールはチームでやらないといけな。グランドゴルフは簡易版ですから一人でできる。私たちが若い頃、大学に行くと最初にやっていたのはマージャンです。今の学生さんたち、マージャンやらなくなっているんじゃないですか？ パチンコの方が多いのではないですか。マージャンも4人揃わないとできない。人と人がつながるような事例がどんどん遊びの面でも少なくなってきた。

大八木さんはラグビーですが、同志社と言えばラグビーですね、今年ももう一つだけ。同志社で忘れちゃいけないのは今年のヒーローだったのはフェンシングですよ、太田選手。私はフェンシングを中学から10年くらいやっていました。自分を振り返っても本当にスポーツのクラブを通して今の生き方の大半は学んだという感じがします。学校ではもちろん勉強を教えてもらって、一生懸命大学まで進んだわけですが、それ以上に生き方を学んだのはクラブですね。中学、高校が一貫でしたが、そこで初めて先輩という概念をね、きちっと刻みました。後輩という概念もそこで初めて出てくる。中学校1年生にとって高校3年生は、おっさんですよ。高校3年生にとって中学1年生は、どこからみてもほんとに可愛い子どもです。これが一つのクラブで同じような練習を積み重ねていくというのは、人間というのはどれだけ成長していくのだろうか。どれだけ小さな子どもたちはきちりと守っていなければならないか。逆に大人たちはどれだけ頼もしくて偉大な存在だろ

うか、これを学ぶのはクラブでしかない。大学に入ると真先に酒の飲み方とか、そんなことになってしまうのも運動部だったですけどね。悪いことも、いいことも皆、運動部で教えてくれる。これ以上無理なことをしたら身体を壊すということも教えてくれるのも皆、クラブでした。その中でルールを守り、そして人の能力については差がある中で、お互いに庇いあい、支えあい、そしてそれぞれ一人ひとりが自分の得意な点を持っているし、不利な点を持っている。そのあたりを組み合わせていくことによって社会が成り立っていくというのを学ぶのも全部クラブを通してです。フェンシングはチームスポーツではありませんから、ラグビーのようにスクラムを組んでというわけにいきませんが、それでも誰が先鋒を務め、誰が次鋒を務め、誰が大將を務めていくかという組み合わせ、この一つをとっても人の特徴、人の生き方を考えていくそのものになるわけですね。

私は常に先鋒でした。一番凶々しくて元気がいい。まず動揺もしないし、実力も発揮できるから真先に行け。そこで気合を入れてワッとやって、次につなぐ。ここで私が負けるとチームはカタッと言って、次のところには、少し実力はあるんだけど、性格的におとなしい奴が配置されていましたので、私が負けてしまうと、その次は悪循環になる。これは勝たないといけないという役割を負って常にやっていました。大学4年まで一応ちゃんと関東リーグに出ておりました。そういう積み重ねがあるからこそ、スポーツのよさはわかります。スポーツというのがどれだけ人というものを育て、どれだけ人と人とのつながりがあるか。今もそのつながりは私を生かしてくれています。

新川先生も真山先生も私にとっては大切なアドバイザーですが、一緒にフェンシングをやっていた奴が今、東京大学の都市計画の教授になっていまして、これが今、京都府の参与として来てくれています。横浜市の中田さんの参与もやっているんですが、横浜市はすごくて参与到一月20万円を超えるお金を払っているらしいんです。うちは1回来るとわずか1万円ちょっとを、ね、お渡しするだけで、いつもお前は俺をなめているのかと言われるんです。なめているわけではなく、会って飲むので許してくれという話ですずっと来てくれています。今もそうい

う面では少ない謝礼で来てくれる。これもフェンシング部のつながりです。こんなつながりはいくらでもあって、自分の出た高校ではないところのある女子高が修学旅行に来るんですが、その先生が、京都に修学旅行に行くから知事、書いてくれ。この先生もフェンシング部の先輩ですね。そういう人たちが何かあったら動いてくれている。京都では日本のフェンシング史上では一番偉大な人のお一人が同志社の田淵先生なんです。田淵先生とそうしたご縁の中で、また人間関係ができていく。太田選手を高校1年の時から応援して高知の国体でも応援したのも、そういう一つひとつのつながりです。

こういうつながりをつくっていく中に、少なくとも社会のせいになり、誰が悪いからというものは出てきません。スポーツというのは、ある意味で残酷です。スポーツというのは鏡のように自分を写し出しますから。悪いのは自分なんです。努力しない人は報われません。これがスポーツです。自分の才能と自分の練習の結果であって、でも助けてくれる人がいるのもスポーツなんです。こうした点を地域に還元していくというのは、これからの子どもたち、これからの社会をつくりあげていく上で何事にも代えがたい、すばらしいソーシャル・キャピタルではないかと思っています。

では京都としてどういう形でソーシャル・キャピタルをつくっていくのか。15の絆という形で、子育ての絆、割れ窓運動のように安心・安全の絆も着実につくっているんですが、スポーツにおいては、もちろん学校現場におけるスポーツをきちっとやっていく、これも大切です。京都の場合にはその仕組みを国体以後つくりあげてきていまして、今、多くの高校が特徴あるスポーツの優秀な成績を上げてきております。これは私立も市立も府立も一緒です。このあたりを強化していきたいと思ひまして今年は二人の世界的な選手を京都府立高校で採用いたしました。お二人とも高校の免許は持ってない。でも実力は折り紙付き。一人は女子レスリングの正田選手。世界チャンピオンにもなった方です。もう一人は池端という選手です。フェンシングです。縁というのは不思議だなと思ひますが、この選手も大変な実力を持っております。日本女子ですが、日本女子はオリンピックに出ておりません。正田選手も出ておりません。こ

こが実は鍵だと思っていますが、北京オリンピックは出られませんでした。池端選手は日本女子チームのナンバー2ですが、日本女子チームは世界ランク6位です。6位でもオリンピックに出られないんですね。これは気の毒としか言いようがなかった。Aランク4位までがオートマチックで出て行って、それ以降は各大陸別、地域別の選手が出たんです。まずいことに5位が中国だった。6位が日本だった。本当は中国は開催国ですから開催国枠で国体と同じように出られるんですよ。ところが開催国枠を使うと、試合の日程が決まっています世界1位とトーナメントであたるんですって。それで中国は開催国枠を放棄した。そのために日本女子は行けなかった。池端選手もオリンピックに行けなかった。こういう選手です。日本ランクは2位です。この選手を高校教諭として、知事は学校の先生の採用にはタッチできません。タッチしたらそのまま私は京都府教育委員会のお世話ではなく、京都府警のお世話になりますから。いいなと思いましたが、ともに世界的な間違いのない一級の選手でありながら、ともにオリンピックを逃がした。そういう挫折を味わった選手。こういう人は強いと思うんですよ。こういう人は行けると思っています。こういう人たちが高校教育でこれからやっていただける。これはすばらしい力になると思います。京都の場合、国体が終わってから20年たって、まだ競技の総合成績ではシングルの地位を2年に1回はとっています。こんな県は全国規模からいうとありません。国体が終わった瞬間に47位になった県もあります。そんなもんなんですよ、人口の多いところに行ってしまうんです。しかし基礎ができています。こういうものを学校教育でやっていく。

それと地域において、人と人のかかわりが薄れてきた地域において、スポーツを通して、もう一回、人と人がつながる社会をつくっていく、これを一番、施策としては狙っていきたいと思っています。これを「総合型スポーツクラブ」という言い方をしています。今、京都府内で27カ所、総合型スポーツクラブが北は京丹後から南も動いてきてきています。ここでは老若男女を問わず、地域でリーダーが生まれてスポーツクラブをやっていく。これは文部科学省も奨励しているところですし、この動きはこれからも広まっていくと思います。私が地域力

再生交付金をつくった時に、この中で去年、今年と20以上の地域力再生交付金の対象になり、それぞれのスポーツ活動に投入されていてあります。そういう動きがどんどん広がっていくことが、これからの京都のソーシャル・キャピタルを増す上で、絶対、確かだと思っています。

ただもう一つ、もっと京都の特徴を生かした形で、この総合型スポーツクラブをつくっていきたくと思っています。地域社会は昔のように戻らないと思います。ムラ社会が崩れてきてしまった。内と外を分けるようなムラ型の昔の日本のソーシャル・キャピタルというのは、この時代においては産業構造が変わり、社会構造が変わっていく中で、私たちはそこに郷愁を持ちこすすれ、ムラ型のソーシャル・キャピタルは戻るとは思いません。そういう閉鎖的なソーシャル・キャピタルではなく、私たちが目指さないといけないのは、地縁団体、地域社会があるけれども、NPOを中心にとか、さまざまな広がりがあるものへ。スポーツでもさまざまな高齢者の健康クラブから、子どもたちの少年クラブが結構、京都は盛んです。女性のスポーツクラブ、これも京都は盛んなんです。地域社会を取り巻きながら地域社会をさらに超えていく、さまざまなNPO、さまざまな運動団体が京都にはたくさんある。NPO一人あたりの数は京都は東京に次いで全国2位です。こうした動きを地域というものを中心として、もう一度まとめあげていく。

基本的にこれを「開放型の地域力」と呼んでおりますが、昭和の地域力が閉鎖型の地域力だとすると、平成の地域力は開放型にしなければいけない。地縁団体、自治会を核とするとしても、他にも縦横無尽にいろいろなグループが、そこに連結していくことによる開放型地域力をつくりあげる。そうすると京都ももっと施設が生きると思っています。一番いい例が大学です。京都には47も大学があるんですよ。ここが地域に開放されていくと、まさに開放型ができるわけですね。京都教育大学がすでに動いてきています。同志社も動いていただきたいと思うんですよ。同志社が持っている地域力が全開になれば、立命館も京都産業大学も47の大学が持っている施設が地域に向かって動き始めたら、それだけで京都の地域力、ソーシャル・キャピタル

は、これはものすごい力を持つと思います。もちろん府立高校もやります。すでに3つの高校で開放型スポーツクラブをつくっております。剣道とレスリングとか、府立高校の持っている国体を契機とした力を地域に還元していく。開放型の府立高校ができる。もちろん学校開放というレベルがあります。学校開放をさらに進めていきたいわけですね。もっと地域と学校がソーシャル・キャピタルという形でスポーツクラブで結び付く時代に入ってくるのではないかと。今、4つの府立高校で、すでに進めております。太陽ガ丘のスポーツクラブ、京丹後の自然運動公園、こうしたところも拠点になっていく。こういうものが縦横無尽に結び付いていくと、スポーツを通したソーシャル・キャピタルというのは京都にとって新しい地域社会を形成するような実力を持つてくると思っております。

スポーツというのは、たかがスポーツかもしれませんが、されどスポーツです。このスポーツを通していくことは、これから多くの若い人々を育て、救い、そしてその中で大人も子どもも、一つの目線で行っていく。その上にトップアスリートが来る社会というのは、地域の誇りであり、地域の宝が、その中から生まれてくるという過程を体験できると思っております。京都府もそうした拠点を中心とした、開放型スポーツクラブを、これからしっかりと育てていきたい。体育施設も本当は言わないといけないんですが、森元首相がワールドカップを誘致するといっても京都には球技専門の競技場がない。これからの課題としてやっていかないといけない。皆が走れるような施設もつくらないといけない。鴨川は四条から上はいいんですが、四条から下、七条あたりは、あかんのですわ。そこからさらに下に行ったら残念ながら、いかん。このあたりはぜひとも日本の誇るジョギングロードにしたいなど。鴨川を上から下まで加茂から三川合流地点まで走れたら、すばらしい四季と、すばらしい川の流れと、蛍まで飛んだり、鮎が泳いだり、こういうものをつくっていききたいと思っておりますが、こういう夢も、これは夢じゃないです。やります。地域力再生とスポーツ、ソーシャル・キャピタル、この大きな流れの中で京都が元気になるように、皆さんとも頑張っていきたいと思っております。

時間がまいりまして次のセッションも聴けないのは残念ですが、きっと思いは共有できると思います。どうかよろしく申し上げます。ご静聴ありがとうございます。

〈横山〉 どうもありがとうございます。それでは知事が退席されますので拍手をよろしく願いたします。

#### キーノートレクチャー

〈横山〉 ただいまより再開いたします。大八木先生よろしく申し上げます。元ラグビー日本代表で同志社の3連覇の時の立役者ですが、神戸製鋼の時も、その前の伏見工業でも皆さんもご存じのような大活躍をされました。現在、同志社の総合政策科学研究科博士後期課程で勉強されています。また高知中央高校で監督、コーチではなく日本で初めてのGMという制度で青少年育成に取り組んでおられ、香川大学でも客員教授をされています。京都府社会教育委員もされています。いろんな役職を兼ねられまして、森先生からお褒めをいただきました。給料が安くても頑張っているというところで、ソーシャル・キャピタル形成には大変打って付けのお話をしていただけたと思います。よろしく申し上げます。

#### 地域力再生に果たすトップアスリートの役割

大八木淳史（同志社大学大学院  
総合政策科学研究科後期博士課程在学中  
元ラグビー日本代表）

こうしたシンポジウムには何度か立たせていただきまして、キーノートレクチャーを含め、やらせていただきました。今日は一番やりにくいシンポジウムになりまして、森元総理も京都府知事も私自身にお褒めの言葉をいただいたんですが、言うだけ言うで「後は任したで」という雰囲気でございます。取り残された僕としてはやりにくい。新川先生はじめ、真山先生、横山先生は私の直属上司ではなく先生でございます。私は学生、生徒でございますので。難しいですが、「地域力再生に果たすトップアスリートの役割」というテーマでございます。

先程、高知中央高等学校ラグビー部が、僕はGMなんです、12月6日、全国大会第88回全国

高校ラグビー大会の抽選日やったんです、対戦相手が福島県の平工業という、強いところなんです、それも一回戦の27日、13時15分からは謎の第二グラウンドで初出場、初登場することが決まりました。ぜひ花園グラウンドに足を運んでいただいて、日本中で一番弱い代表やと評価しておりますが、その戦いぶりを見ていただいたらいいかなと思うわけです。

最初に、なぜ中央高等学校のラグビー部をつくること、みることになったか、二つほどに集約して申し上げます。一つはスポーツ選手のトップアスリートの引退後の、言うならば生き方ということ。セカンドキャリアとか耳にしますが、本当にあるスポーツを、ある時、日本国を代表して、まだ試合が始まる前、「君が代」を聴いて、右手で左の胸、ラグビーでいいますと桜のエンブレムがついています。それをあてながら、ニュージーランドのオールブラックスと対戦したこともあったんです。100点以上負けるんですが、命をかけて日本のラグビーのために戦おうやと燃焼しきっております。企業のチームでも神戸製鋼、勝つことに意義があるという、一応、継続することによって自分たちの位置づけを証明してきた人間が、ある日、突然、引退というリミットを決めながら、年齢的にどういう立場でプレイヤーとして、神戸製鋼所の仕事の役割として、どういう立場でいるかを考え、計算するんですが、しかし僕が振り返りますと、ある日、突然、「もう辞めた」というわけでした、その後の生き方は大きな、大きなテーマでございました。

明日、早稲田と明治、早明戦が、関東大学ラグビー対抗戦があります。我々がやっている時は6、7万人のお客さんが入っていました。今、チケットぴあで1万枚。2万枚まで売れてないんです。そんな状況です、ラグビーは。6万人いる中でやってきた人間が辞めると、37歳で現役引退しました、38、39、40歳くらいまで何となくラグビーのにおいがしました。どこへ行っても呼ばれます。「ラグビーの大八木やろ、大八木さん、まあどうぞ、どうぞ」。40歳超えるあたりから「誰やねん」。当時、特殊なヘアスタイルもしていました。カッパの反対です。「あいつ、元プロレスラーちゃうのん、K1やろ」。それもね、何となくスポーツのにおいを残した人間ということを、ある種、認められているこ

とで、ある意味、自己顕示欲を抑えてきました。それが41、42、43、「なんやねん、このデカイおっさん」ですわ。スポーツのにおいも、どんどん消えてく自分、その葛藤を、こんなことを言いますと、経験したものしか、わからないという一言で終わらすような体験ではございませんでした。

そこで自分が何をやりたいかというテーマです。新川先生、真山先生、横山先生、どうや、一番自分の欠落している部分に気がつくわけです。何やねん。15歳から山口良治という「スクールウォーズ」、山田知事が言うてくれはりました。あの恩師に出会って楯岡球がメインでございました。勉強してへんわ。アカデミック、アカデミズム、全く欠如しとるな。横山先生がいつも言わはります、そこやと。現場経験をした人間が理論、知識、それを装備したら鬼に金棒です。昔、ラグビーの林さん、僕より2つ上で同志社大学で、神戸製鋼です。鬼に金棒と言った時、林さんは「ヘッドキャップに林敏之と言っほしい」と。ウケへんな、やっぱり。それくらい我々消費されている。平尾知ってる？知ってますか。僕よりちょっとだけ男前なんです。笑いも出んし、あいつも消費された。

そこでセカンドキャリアです。一つ何をやりたいか、まとめるために同志社大学大学院総合政策科学研究科の門を叩きました。着実に整理整頓、頭の中でできてきた感じがしております。その中で一つ、森先生もおっしゃいました。今、礼儀がない。果たして僕も学生時代、礼儀があったのかなというのは「？」でした。山田知事も言いました。スポーツは人とつながる。そんな要素を持っていることがソーシャル・キャピタルだと。そうやと思います。

次、セカンドキャリア、大八木淳史は自分がラグビーで得た経験知、俗にいう暗黙知と形式知を経験してきたことを何かのために青少年育成にならへんかということの一つが高知中央高校の取り組みでございました。高知中央高校は偏差値が低いところでした、土佐高とか、次に公立高校があって、そこにも行けへんところがあって、そこにも行けへん私立があって、段差を降りないとあかんくらい、3月31日に願書を出しても4月8日に入学できるようなレベルの学校であります。そんな、アホちゃいますよ。その学校に取り組んだんですが、高知県、す

ばらしいところですが、その学校も少子化でして入学者数がどんどん少なくなっていく。学校がとった対策は社会的弱者です。母子父子家庭、経済的に困っている家庭に公平な勉強をさせるということで、看護科というのを一つ対策といたしました。中国地方、近畿地方、四国の大学病院と提携しまして看護科に入学した瞬間にそこから奨学金をいただいて、学生生活の間は大学病院の奨学金で勉強できる。それはそれでよかったです。そしたら普通科の子どもたち、何を目的意識を持って、勉学に励むか。その一つがスポーツなんですね。スポーツによって普通科の子どもたちの学校再生、教育再生をやるうやないかと。5年前から考えられてスポーツを強化していきました。野球、サッカー、バスケット、バレーボール、本来、教育再生、学校経営を戻すためにスポーツを利用した計画やったんですが、一つ、二つやることになりました。野球は9人でやる、サッカーは11人です。しかし甲子園に出てくる野球部、100人以上、その部にはいるわけです。100人の中で9人でやるスポーツ、精鋭部隊は30人くらいいたらええ選手ばかり集めてやれば、それこそ、ええところまで行くわけです。残りの70人、野球が好きな、地方から集めたお山の大将です。そんな連中に皆で甲子園に行こう、しかしその30人枠に入れない70人は野球をすることを諦めたり、問題やスキャンダルになるようなことをする。規範ルールを乱すようなことをするわけです。この間、大学の大麻の事件とかありますが、そんな問題を起こす連中に、どうモチベーションを持たせるか。大好きな野球ができへん連中、野球をとられると退部イコール退学という方程式が出てくる。そこで考えた中央高校は最後の受け皿として、ラグビーというスポーツの持っている精神性、ラグビーの可能性に賭けたかったんですね。

2年前の2月に初めて高知中央高校の理事長に会いました。子どもたち600人以上いるんですよ。話をスポットで講演したら、いいんかなと思ったら、どんどん話が進んで「子どもらの受け皿になってくれよ」と言われまして、2月に会って3月1日、創部。ほんとにスピーディに決まって。僕が取り組んでいるスポーツによる青少年育成です。今までにない、文部科学省で定めた部活にないようなシステムによってス

ポーツを最大限に利用して子どもたちに何かできないか。即ち、引き受けました。これで試してみよう。でも世の中、オモロイもんですわ、行くとね、皆に言われました。ラグビー関係者とか、神戸製鋼の連中も。「大八木さん、なんで、高知なんや」。酒の好きな武藤というのがいるんです。「酒一杯飲めるから？」とアホなことを言います。あいつの意見が一番正しかったんですが。「なんで高知なんや。きっと15人制のラグビーのチームができる、学校数が少ないし、すぐに全国大会に行けると思って引き受けたんか?」。もう一つは「これ、ちゃうのん、ごっついことをもろたん、ちゃうのん」。ラグビー関係者が言いましたけどね、お金で行ったんと。違うんです。

総合政策科学研究科で学んだ理論、知識を使って僕の実践した経験知をぶつけてみたかったです。それはひどかったです。今日も高知からわざわざ来てくれた創部の立役者の方、来ていただいています、2月の終わりに紹介されたんです、朝礼で。六百何十人前に。女の子もいました。「3月1日からラグビー部ができる。元日本代表の大八木淳史さんです」。僕の現役時代の姿を見ている奴、いませんよ。「あいつ、長淵ファンの代表や」とかね。そんな感じですよ。タレントの大八木ですよ。30分、ラグビーの話をしたんです。熱い話を女の子も聴いてくれて、最後、講堂体育館で「ラグビー部に入りたい奴、体育館に残ってくれ」と言うて終わったんです。教頭先生、「以上で朝礼終わります。解散」。雲の子を散らすように出ていきやがってパッと見たら6人です。6人が真ん中に集まっていた。ワートと言ったんです。こんな毛ですよ。ボタン外して。ガム噛んで。「大八木さん、ほんま、ラグビー部できるんですか?」「お前、何を聴いとんねん。30分言ったつたやろ。ほんまにできるんや」「ほんまですか、僕、ラグビーやとったんですよ」「おお、経験者や。ええやん。どこでやとったんや」「土佐塾」。中高一貫の学校です。「土佐塾の中学に入ってラグビーやとった」。ガム噛んでですよ。土佐塾は偏差値でいうたら、高いですよ。中央高校は1階まで降りんといかん、階段で。「なんでこんなとこに来たんや」「ちょっと揉めました」。ぐちゃくちゃとガム噛んで。「ちょっと揉めたんですよ」「辞めんでも、ええやないか」

「いや、ムカつくから最後、職員室のポストに火つけて入れたたんですわ」「お前、放火魔か」「そんなカッコええもんとちゃいますけどね」。

そこで僕はピピッと来たんです。「わかった、その勇気を買って、お前、キャプテンにしたるわ」。他の5人ほどに「そやろ、お前ら放火したことあるか?」「ないです、ないです」「みてみい。お前は一番えらいんや。放火なんて、なかなかできへん。俺もやったことない。その勇気でキャプテンや」。ガム噛みながら「僕、キャプテンですか?」。ガム、ガムでっせ。ダイレクトにガム出して、ここにポケットに入れよったんです。紙にも包まんと。「わかりました、大八木GM、キャプテン、ですよね」「そうや、お前、勇気あるやろ」「わかりました」。ボタン止めだして「僕、キャプテンやらせてもらいます」。これですよ、スポーツの教育力。ガムだって、そのまま入れさす力です。

しかし残念ながら彼は1年ダブッてまして、ええとこの子やったんですよ。高知県の中では有名な飲食店のね。夏までに彼は退学してしまいました。もう一人、悲しい事例、これは事実なんです、サッカー部の落ちこぼれを引き受けたんですよ。名前は仮にA君とします。細い、細い子です。サッカー部で、茶髪で、このへん5つほど穴があいて、なんで、サッカーって穴をあけるのかなと思うんですけど。黒毛がだんだん出てきて、きたない。ラグビーの練習をさせる。フケだらけだった。ある日、練習の時、「A君、お前、フケだらけや、髪の毛も切ってこい。」こんな教育者が言うたらアウトです。僕はGMですから。もう少しで潰れそうなGMですけど。「お母ちゃんに言うて風呂でも沸かしてもらうて風呂に入ってこい。散髪も行ってこい」。細い、細いんです。「僕、お母ちゃん、いいひんもん」。アチャーッ、父子家庭や。いらんこと言うてしもうた。そこで終わったらええのに、世界選抜の大八木です。「お父ちゃんに言うて風呂沸かしてもらえ」「お父ちゃんもいいひんもん」。ワッチャーッ。両親おらんへんや。「どうしてるねん」「親戚のおじさんと暮らしてます」。親戚のおじちゃん、長距離トラックの運転手。月のうち1週間も帰ってきたらええ方です。「晩飯どうしてるんや」「コンビニ弁当や」。可哀相やな。「たまには晩飯食おうや」「はあ」。

次の日、教頭にその話をしたんです。実はこ

ういうことがありましてと教頭先生が「大八木さん、まあ聴いてください」。A君、実は小学校の時、学校から帰ってきてアパートをガチャッと開けたら台所と居間の間の鴨居にお父さんとお母さんが首をつって死んでるところを目撃した子どもだったんですよ。ワッ。見る目がかわりますやん、次から。「もうお前、ボウボウでもええんやで。フケ、20センチくらい溜まってもええやん」。でも彼は再生してサッカーを選んでサッカーがうまいかなんで、ラグビーで拾うてもろうた。教頭は偉かった。「そんな意識でみんといてくれ」と言われました。

でも悲しい事実が一つあって、4月に話を聴いて、その後、夏合宿に行くんです。そこで一回り、ラグビー選手、高校生も大きくなるんです。当然、1年目は伏見工業の胸を借りにきたんですが、夏合宿するには夏合宿の経費がいるわけです。10日あれば10万円いるわけです。学校が5万円負担する。5万円は実費です。A君、悩んで6月終わりからクラブにきいへんようになりました。ある生徒に聞いた。バイトして合宿費稼いでいるという話もありました。そのままずっと来なくて、我々が合宿に行っている間に、実は一人で学校に夏休みに来まして校長と教頭の前に表れて退学届を出した。夏合宿に行っている間に退学届を持って校長、教頭に出したんですよ。「何をやるねん」と聞くと「おじちゃんがマグロの遠洋漁業に出ている。その船に乗るんです」「なんやその頭は」。坊主にしてちゃんとしてたんですよ。ここだけピンクにしてたんですって。彼が言うのが面白いです。「船に乗るのは僕、初めてやから、船から落ちた時、発見されやすいようにピンクにした」。ええコメントですわ。去り際に紙袋に入ったものを教頭に預けたんですよ。我々が夏合宿から帰って、それを渡されたんですよ。中身を開けたらミズノのラグビーのスパイクが入ってたんですよ。教頭に言うたらしいです。「僕は漁師になるから、このスパイクはもういらんし、誰か足の合う奴のラグビー選手に渡しておいてくれ」と言って去っていきました。その後、彼に連絡したことはないし、燃料が高い時、マグロの漁がどうやったんか、心配でしたけど、これも現実でございます。

総合政策科学研究科に来て政策決定の話とか、僕ら全然知らなかった未知の世界の勉強を

させていただくんですが、理想を求めて論文上、こんなことでトップアスリートが行って本当に困っている連中に会って、何か生き方とか、人生のためになったらいいんじゃないかと考えてやっていた人間が、実は現場、現実以降りると自分が思っている理想と現実のギャップの大きさを埋めることもできへんような深さに気がつかされるわけですし、さっきのような事例の話を上げさせていただきます。

この間、日本体育スポーツ政策学会で学会発表をさせていただきました。横山先生に、お話しする機会を設けていただきました。37歳で辞めて今年47ですが、講演、スピーチを1,200回くらいやってるんです。学会発表2回目やったんです。たった15分です。講演は90分です。目茶苦茶、緊張しました。もうね、へんな汗が出るというか、額から。「もっと緊張したのは僕や」と横山先生に言われて「何を言いだすのや、大八木」と。

そこで気がついたことがあったんですね。すばらしい各大学の先生方の発表がありまして、シンポジウムもすばらしかったんですが、そこで気になったことがありました。各大学におけるスポーツ学科と名のつく、同志社大学もスポーツ健康科学部というのができましたが、それがですね、日本全国中、非常に増えていると初めて気がついたんです。ある先生、うまいことを言いました。「スポーツ業界だけは大学でバブルになっとる」。またある先生が言いました。「しかしそのスポーツ学部を出て、将来、どこに勤めるのかまた問題やろな。皆、体育の先生になるなら別やけど」。そうか、学問、勉強の中では僕も、この間、博論の中間論文を書かせていただきましたけど、あらゆる学問は今、スポーツ、あらゆるスポーツの歴史なり、スポーツの考え方が、スポーツの組織体、スポーツの理論など、あらゆる学問がスポーツというキーワードに依拠しようとしているのがわかったんです。スポーツ政策学会でも僕だけですわ、トップアスリートは。「あんた、ほんまにスポーツやってたん？」というおじいさんとかね、「大丈夫なん？」という。わかりました。自画自賛するわけでは何でもないんですが。

まとめに入ります。同志社大学スポーツ健康科学部の方おられるかどうかわかりませんが、スポーツ政策というところから位置づけされて

います。本当に、こう、スポーツのアスリートとスポーツを社会に役立てる学問がリンクできているのは同志社だけやと思いました。スポーツのええところ、悪いところ一杯ありますが、ご理解いただいて、同志社大学のラグビー部、弱いとか、問題を起こすとと言われてきましたが、どうかどうか、スポーツによって、いろんなことを変化できる、ソーシャル・キャピタルという位置づけで、力と富とパワー、その面では今日も実証されました。元総理が言うんですから正しいです。元東大法学部卒業の知事さんが言われるのですから正しいです。あれだけスポーツを力強く表現された以上、スポーツを皆さん、ご理解いただいて、いい社会づくりにはスポーツやというキーワードを持っていただくことをキーノートレクチャーのまとめとさせていただきます。ありがとうございます。

〈横山〉ありがとうございます。それでは真山達志先生です。総合政策科学研究科教授で政策学部の現在、学部長をされています。ご専門は地方自治、行政学のご研究をされていて、山田知事からもありましたように京都府職員の政策形成能力の講座など自治体のご指導もされておられます。私とは法学部でご一緒だったということで、スポーツのシンポジウムにはいつもパネリストとして参加していただきまして、スポーツのことについてご指導いただいております。

まとめとしてソーシャル・キャピタルとは何かという、皆さんもご理解は固まってこられたかと思いますが、その形成について、セオリー的なところからお話していただくことになるかと思えます。よろしく願いいたします。

#### ソーシャル・キャピタルの形成過程

真山達志

(同志社大学大学院総合政策科学研究科教授・  
政策学部長)

ご紹介いただきました真山と申します。私、総合政策科学研究科の所属であると同時に学部は政策学部であります。主催者側ということになります。最初に森元首相のお話、山田知事のお話、大八木さんのお話とありまして、それぞれ一つひとつ大変興味深い話があったんですが、最後に私がまとめろとおっしゃったんです

が、この3つの話を聴いていて、どうまとめるかなと。まとめようがないということで、まとめることは最初から諦めまして、私自身も勝手にしゃべらせていただきます。

今日、与えられましたテーマが「ソーシャル・キャピタルの形成過程」ということで、コーディネーターの横山先生がこういう話でしゃべれと。例年、スポーツ政策シンポジウムの時には横山先生から指示が飛びまして、横山先生に「右がなぜ左かというテーマでしゃべれ」と言われたら、そういうテーマでしゃべろうと思っています。右は左になるということを理屈上、説明できるなという、これでノーベル賞がとれるかなと思ったりしたんですが。ソーシャル・キャピタルはそもそも何なのか。それとスポーツはどう関係するのかということを最後にまとめにできればいいなというつもりで若干、お話をさせていただきます。

最初から聴いておられる方は冒頭、新川研究科長が開催の挨拶でソーシャル・キャピタルとはどういうものか、すでにご説明なさいました。短時間で明確に説明されましたので、しかし時間もたちましたので、お忘れの方もいらっしゃると思うので、ちょっと復習させていただきます。ソーシャル・キャピタルというカタカナですが、お話の中でも登場してきたかと思いますが、日本語に訳す時にちょっと厄介なんですね。ソーシャル・キャピタルを英語の辞書を引きながらそのまま日本語に変えますとソーシャルは社会です、キャピタルは資本です。「社会資本」と訳せます。ところが日本で社会資本というと道路、水道とかを社会資本と言っています。別の言葉で言うと社会基盤、生活基盤、都市基盤という社会を構成する人々の生活や産業活動、経済活動のもとになる基盤のことを社会資本と一般的に言っています。

ところが、ここで言うソーシャル・キャピタルは、それを指しているのではなく、地域、一定の社会の中での人々の人間関係、信頼関係、ネットワーク、人々間のコミュニケーションというものが、いい形で成り立っている。そういうことに注目した概念です。そこでソーシャル・キャピタルをそのまま社会資本と訳すとまずいので、いろんな訳があるんですが、一番多いのは「社会関係資本」。ここで関係というのをわざわざ入れたのは、ソーシャル・キャピ

タルが一番重視しているのが人間関係、人と人とのつながり、知事の言葉では「絆」に注目していることから社会関係資本という訳が一般的に使われているかと思います。人間関係、信頼関係、ネットワーク、コミュニケーションというものがソーシャル・キャピタルの中心概念になります。

そこで私に与えられているテーマのソーシャル・キャピタルの形成過程ですが、地域、社会の中でソーシャル・キャピタルが0ということはありません。人間関係が全くない社会はありません。離れ小島、無人島で一人で暮らしていることは別として、人間である以上、普通の社会活動していれば、生活していれば必ず何らかのソーシャル・キャピタルのもとに生活しているわけです。0から形成していくということは決して現実的ではなくて、ソーシャル・キャピタルの多い、少ないところに注目して、形成過程はあまり多くないソーシャル・キャピタルを拡大していく、強化していく、強くしていくというようなことになるかと思っています。

そう考えますと、昔は地域社会、ソーシャル・キャピタルという部分はたくさんあった、強かった、人間関係が濃密だった。隣近所、地域の人、皆、顔見知りで普段からよくコミュニケーションがとれていた。協力があっていた。それが最近、だんだん弱まってきている。ソーシャル・キャピタルが小さくなっているということが問題になっているわけです。従来、ちょっと前までは都会が特にひどい。隣は誰かわからないという生活が都会は多かった。それに対して地方、田舎は比較的ソーシャル・キャピタルがあったと言われていたんですが、最近はどうでもなくなってきています。地方、田舎と言われるところの方が逆にもっとソーシャル・キャピタルが危機的状況になっていると言われます。それは高齢化が進んでいる、人口減少と高齢化が進んでいることが大きな原因です。「限界集落」という言葉があります。どぎつい言葉ですが、ここが限界というところまでいっている集落。少子化、高齢化が進んでいって、人口減少が進んでいって、住んでいる人たちの半分以上が高齢者という地方の集落に対して与えられている名前ですが、極端なところに行くと80%以上、90%が高齢者、しかも人口がどんどん減っている。もうちょっといくと限界になる、

限界を超えてしまい、集落とかは地域社会という実態ではなくなってしまっている。ソーシャル・キャピタルは限りなく0になってしまうところがある、現実には地方にはかなり出てきています。

そういう意味でも何とかしてソーシャル・キャピタルを増やしていく、高めていくことが現代社会の大きな課題になっているわけです。この課題をどうやって解決するか。今は世界金融不安で大変景気が悪くなってきたということで経済をどうするか、経済をどう建て直すかということが重要、緊急の課題ですが、それと並ぶくらい緊急かつ重要な課題だろうと思います。だからこそ知事も「地域力再生」を言われていて、それが府の重要施策になっているのだと思います。

ところが大事なのはわかっているんですが、どうしたら解決できるかという方法が見つからない。方法とまでいなくてもヒントになるものも見つからないわけですね。それでいろんな人が努力したり、工夫したりしているんですが、その中の一つに今日のテーマにあるスポーツを使って何かできないかということがあると思います。これもまた、皆さんご存じだと思いますが、スポーツにはいろんな効用があると言われていています。スポーツにはチームワークが必要、フェアプレー精神が必要とか、スポーツをやること人間、楽しみを覚える。楽しいことを経験できる。確かにスポーツを行うことをプレーと言います。プレーは遊ぶという意味もあります。プレーの後にスポーツの名前を持っている、プレーの後に楽器を持ってくる。音楽とかスポーツは楽しむという要素があることは明らかです。そういう意味からするとスポーツは人々にとってワクワクさせる、楽しみを与える、皆一緒にやってやれるという特徴がありますので、どうやらソーシャル・キャピタルが言っている人間関係、コミュニケーションに直接、効果を発揮するのではないかという期待があるわけです。それを政策的にもやっていこうというのが知事の話にもありましたが、地域に総合型スポーツクラブをつくって地域の人がスポーツクラブに集まってきてスポーツをしたり、話をしたり、酒を飲んでもいいでしょうし、地域間のコミュニケーションをつくって人と人とのつながりを、もう一度つくりあげていこう。知事が

言われたように昔のようなムラ社会の人間関係ではなく、現代風、今の人たちの生活様式、価値観にあった人間関係をつくっていく一つのきっかけになるのではないかという期待があるわけです。

これはスポーツ関係者、スポーツをやっている人たちにとっても自分たちがやっていたことが単に仲間うちの楽しみ、自己実現というだけではなく、社会全体に対して貢献できる、還元できる一つの大きなチャンスでもあるわけです。皆、いいところ取りみたいな感じですね。スポーツ関係者にとっても魅力的ですし、地域にとってもスポーツを一つの契機にしてソーシャル・キャピタルを拡大していける。大きな課題を解決することにつながるということになっているわけです。それがこの政策のシンポジウムとか研究の中でも多くの方が論議され、検討されていることです。私ももともとスポーツが得意とかではないんですが、なぜスポーツのシンポジウムに顔を出しているかということ、横山先生に引っ張り出されていることも一つですが、もう一つは地域の問題、国や自治体の政策を考えていく時にスポーツは重要なポイントになるだろうということがあるので、いろいろ勉強させてもらえる、いいチャンスでもあるので顔を出しているといことなんです。

ただそれですべてうまくいくかと言うと、必ずしもそうではないわけですね。難しい面もあります。それはスポーツの持っているよさの裏返しの部分があるわけです。何事も表と裏があるわけですが、スポーツはチームワークが必要だと。ある種、仲間意識をつくる、仲間の間にいい人間関係をつくれるんですが、一歩間違えると仲間以外とある種、壁をつくってしまう危険性があります。今の若い人を中心に、案外、仲間うちでは仲がいいんですが、それ以外の人とはほとんどコミュニケーションがとれないということがあるんですが、そういう人たちがスポーツをやるチームの中で、ある特定の競技団体ではうまくコミュニケーションがとれているんですが、それが外に向かわない。知事言葉で言うと「開放型」にならない危険性があります。ここが注意しておかないと折角、地域にスポーツクラブをつくっても、スポーツクラブのメンバーの人たちはワイワイガヤガヤ仲良くやっている。大多数のその他の人は何をやって

いるんだろうという感じで脇から見ているだけ。見ているだけならまだいいんですが「何か勝手にやりやがって」という反感になる危険性すらあります。ここがスポーツの難しいところです。

スポーツ関係者の方にしてみると、そんなことはないということでしょうが、残念ながらスポーツに人気があるとか興味が増えてきたというものの、まだまだ多くの人はスポーツを観戦するもの、見るものとして思っているレベルなので、スポーツクラブのように実際に身体を動かすとか、スポーツのために汗を流す、負担をするとすると、一歩も二歩も退くという人が大半といったところが現実だと思えます。そういうところで、あまりスポーツ、スポーツと突っ走ると、融和をしていくのではなく、溝が深まっていく危険性がある。ここら辺をどうしていくかということが大きな問題としてあります。

私の研究領域との兼ね合いで言いますと、スポーツ振興、スポーツを社会の中で発展させていくためには今の日本のように文部科学省がスポーツをやっているということでは手薄で、十分できないので、スポーツ省を作ったほうがいいとか、スポーツ庁をつくった方がいいという意見もあります。なるほどそれは一つの理由もありますし、一理かなと思えますが、スポーツ庁、スポーツ省をつくって本当にうまくいくかどうかと考えた時、スポーツ省は一步間違えると、今、固まっているスポーツ関係者が、よりそこに固まってしまふ危険性もあります。スポーツ省と、それ以外の間で役人たちの綱引きが起こったりすると、スポーツが孤立する危険性すらある、ということも考えないといけない。行政を研究するものにとっては問題の大きな部分なので、しっかり研究し、どう解決するか考えないといけない部分だと思えます。

そういうこともありましてスポーツの可能性、ソーシャル・キャピタルを高めていく可能性に期待しているんですが、期待をすればするほど、どうしたらスポーツが本当に持っている効果を発揮できて社会的に貢献できるか、社会から見た時にスポーツの意義を皆が感じ取られるのか、この具体的な方法のところで慎重に大学院のようなところでしっかりと研究していかないといけないという課題があると思えます。大八木さんはまさにそれを研究して実践の中に

生かしていこうということで、たとえ給料が半分になろうとも頑張っておられるということですね。私などは立場的には実践とか影響力もありませんし、ルートもないんですが、せめて理論的な部分、考え方の部分で、少しでも貢献できればと思っております。

ということで私の話は以上です。どうもありがとうございます。

〈横山〉 どうもありがとうございました。ソーシャル・キャピタルについて今、真山先生にまとめていただきました。簡単に言えばハードパワーとソフトパワーなので、国の力という軍事が強いとか、経済、富がなかったらいかんという話なんです、それだけではだめだろうというのが今の結論かなと思えます。

スポーツの方もそうはいっても勝ち負けがありまして、勝ったらお金が来るし、経済波及効果があるということで今、置き換えれば国の力になるというハードパワー的な面が多くて、真山先生や森先生もお話されていましたが、スポーツ省もそうですね。森さん、河野さん、遠藤さんというラグビートライアングルで、スポーツ庁をつくろうということですから、現代の動向を言いますと。そこが端緒となり日本のスポーツ政策をすすめるということが一つの観点ですね。それが他の事例のように日常的に出てこない。実はこの国会で出る予定だったんです。来年、スポーツ省を宣言して予算もつけてやろうということだったんですが、今、他のことでいろんな形で揉めていまして、出てこない。これをどう考えるか。関係者だけでやっていることにつながるのかな、という気もいたします。

あとは大八木さんがされているように、スポーツは夢、希望を与える、情的な部分を伝えられる、そこのバランスですね。山田知事がおっしゃったように「開放型」が望ましい。つまり橋渡し型ですね。そうでないと真山先生ご指摘のような「結束型」になる。仲良くなってくるが排他的になる。極端に言えばマフィアですよ。ソーシャル・キャピタルにスポーツを使うことはスポーツそのものも、それによってよりよくできるのではないかという期待が、私の中にありまして、今日のようなシンポジウムになったということでございます。

クロストークをしている時間がなくなりまし

た。皆さんからご質問をいただきましてそれにお答えすることによってクロストークに代えたいと思います。

〈質問〉内科医をやっています。在宅医療をやっています。病院に来られなくなった方のところに行くという治療をしています。昔と違って今は医師だけでなく看護師、リハビリの先生とか、ヘルパーさんとかと、いろんな仲間で、医者だけでなく皆が同じ立場でチームをつくって一人の患者さんが家にいられるようにチームワークをつくって治療を行う。在宅医療がスポーツと一緒にラグビーと同じだなと思って聞いていました。在宅医療を通して地域のために住みやすいまちづくりに貢献したいと思うのですが、在宅医療に関して何か具体的なキーワード、ヒントをいただけたら、ありがたいなと思ひます。

〈横山〉スポーツをそこに使えないかということですかね。真山先生、いかがでしょうか。ソーシャル・キャピタルの一つのテーマだと思ひますが、在宅医療とスポーツとの関係で、発展性、展開ということについて。

〈真山〉商売柄、何を聞かれても、すぐ答えを思ひつくんですが、今の質問は、なかなか答えが出てこないんですけど。在宅医療それ自体は重要なテーマで、今、医療の問題は社会の中で注目を集めていますし、問題としても深刻です。特に地方に行きますと医療機関をどうするか、医師をどう確保するかという問題から始まって限界集落に行きますと、そこに住んでいるお年寄りには病院に行けない。周りの誰かが送っていかれるかという限界集落なので若い人たちがいないので送り迎えをする人もいないということになってくると医療機関側、医者の方がそちらへ行って医療行為をしてもらわない限り、健康、命すら危ぶまれる状況の中で在宅医療に尽力されていることは、そういう活動、人たを医療政策として、どのように支援するかという、政策の中に、どのように位置づけるか、医療政策的な問題として話をしろと言われると、いろいろとお話ができそうなんですけど、スポーツと絡めようと思うと難しいので、とりあえず大八木さんにつないでいただきたいと思ひます。

〈大八木〉難しいテーマでござひます。ラグビーに特化してお話しますが、ラグビーでいい言葉が一杯あるんですね。「ノーサイド」にしても「One for All, All for One」にしても。いろいろない

い話があるんですが、中央高校の子どもたちに最初に伝えたかったことはこういうことです。「試合が終わって笛が鳴ってノーサイドになった時、必ず負けた奴の前で喜ばんところ」と。「なんで？」と今の子どもたちは言う。respect。相手がいたからこそ、ラグビーの試合で結果は勝ち得たということで、まさしくその教えはラグビーの独特のことなんですけど、ラグビーを楽しむことも相手があってこそという、ラグビーをすることが、すべて、かかわっているということ、ラグビーという激しいスポーツの中からライバルも含めてのかかわり方を教えられるというところでござひまして。きっと在宅医療に行かれたら病院におじいちゃん、おばあちゃんを若いお母さんが連れてきて、病院で待っているよりも、在宅でおじいちゃん、おばあちゃんがおられたら、お子さん、お孫さん、ひい孫さんまでいて、他界される寸前まで一緒にみとられると、人間の生命、読み書きソロバンでは教えられないところを体現できるというところが、一つのかかわり方みたいな共通点のように気がします。うまく説明できませんが、まとめとして横山先生に渡したいと思ひます。

〈横山〉一つあるんじゃないですか。具体的にはスポーツの持っているチームビルディングの力ではないでしょうか。先生がおっしゃるように、今までのピラミッド型だけでは医療は難しいとなれば、介護士、看護師とか、いろんな方が入ってくる時、はっきり言って序列があつて、なかなかものが言えない。現場を抱えている人たちに指示系統がうまくいかない。となればスポーツチームで言われているのは、どういう形でフラット型のチームビルディングをしていきたいと思いますかと。仲間づくりを、どうしようかということなので、大八木さんが苦勞されているのは、そういうことですね。昔、大八木というビッグネームで認められたと、それでスッと入っていける場があつたんですけど、今はそうではなく、まず溶け込むということなので、そのための目標達成とか、具体的な手法は、いくつかあるかと思ひます。チームビルディングをされていく中で、スポーツの要素を使ひただければ、その次の段階ですね、スポーツとタッグを組んでやるというのは。中のスタッフのチームビルディングをしていただくことが、スポーツ活用の一つの道かなと、私は誰に振っ

ていいかわかりませんが、そういう私の意見で  
ございます。

〈質問〉ありがとうございます。楽しいところ  
にしか人は集まらないということで、また大八  
木さんを始め、お力を貸してください。

〈横山〉ありがとうございました。長時間にわ  
たりましてご協力いただきましてありがとうご  
ざいました。これでスポーツ政策シンポジウム  
を閉会いたします。